

12
二葉 小国 628

国語の本

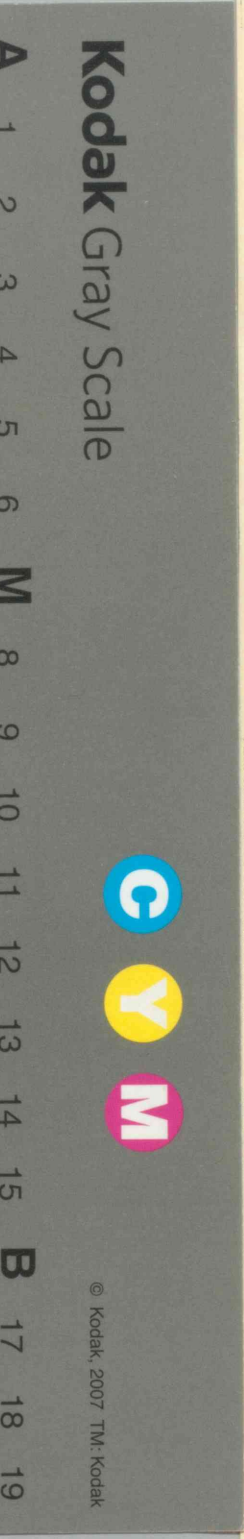
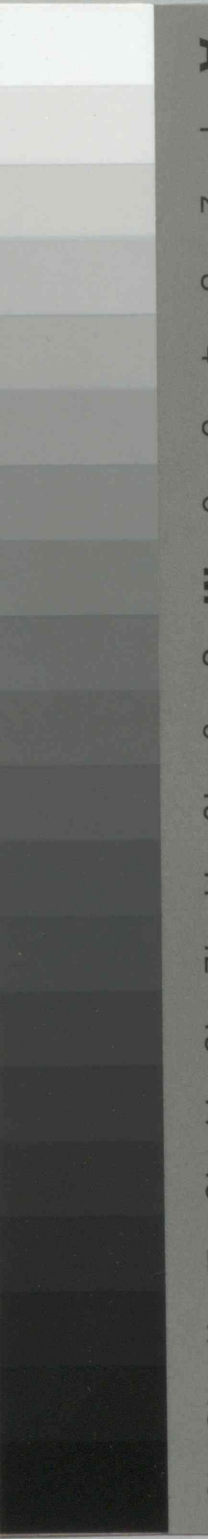
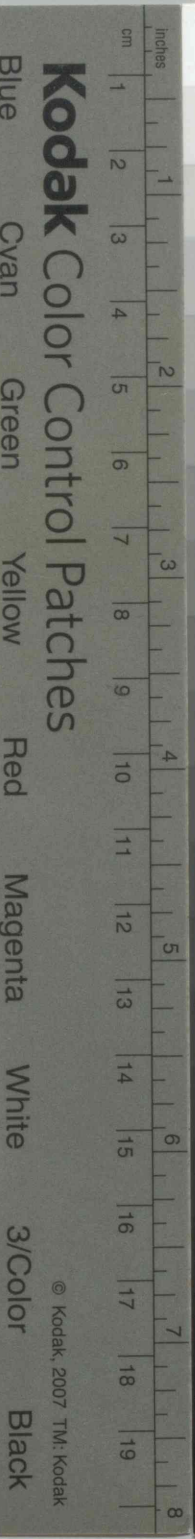
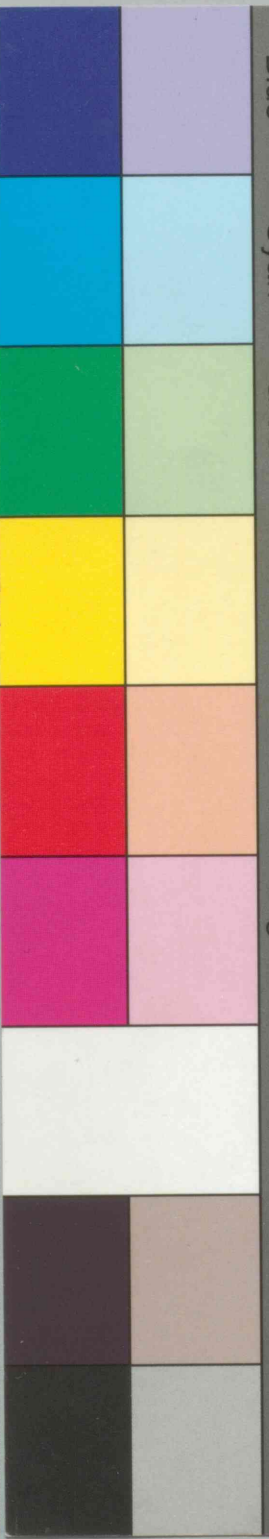
文部省検定教科書
新教育実践研究所編



T1A7
1L0
2

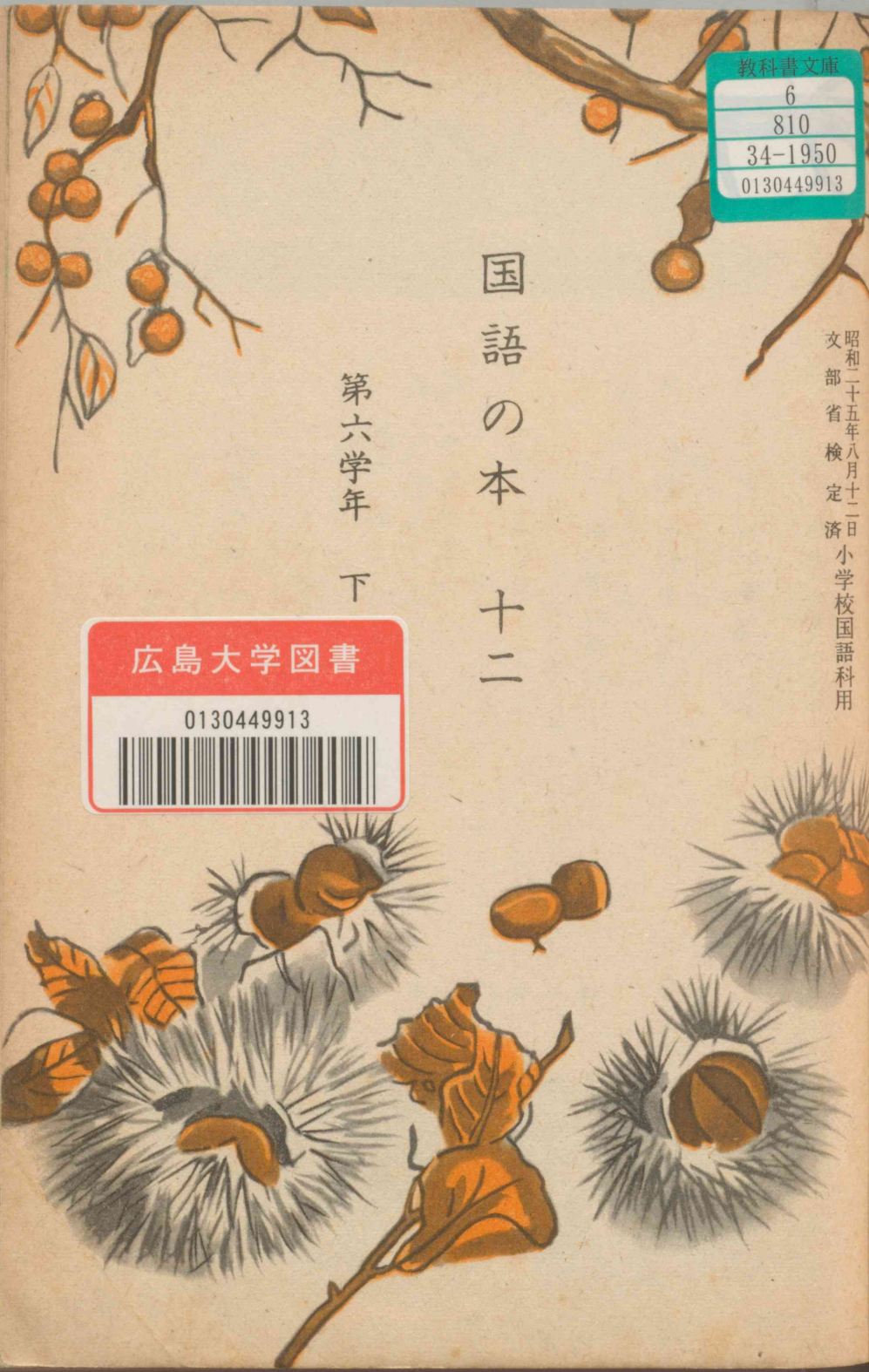
六年下

12



60346
教科書文庫
6
810
39-1950
01304
49913





教科書文庫
6
810
34-1950
0130449913

国語の本 十二

第六学年 下

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

広島大学図書
0130449913

中央図書館

広島大学図書
0130449913

もくろく

一 文学の味わい

(一) タヤけ……………4

(二) ひとふさのぶどう……………13

二 生産の喜び

(一) 造船所……………31

(二) 南氷洋の捕げい……………43

三 日本のおもかげ……………56

四 ことばと生活

(一) 妹のことば……………75

(二) いなかのことば……………80

(三) むかしのことば……………84

(四) 外国のことば……………86

五 ひとすじの道

(一) ベートーベン……………92

(二) ミレー……………103

六 人類のゆめ……………116

七 卒業の日……………128

学習の手引……………	145
新しく出たおもなことば……………	153
新しく出た漢字……………	159





一 文学の味わい方

(一) 夕やけ

下雲へ下雲へ夕やけうつりさる

夕日がしずんでしまつてから後、空一面が夕やけになる時は、地平線に近い下雲（低い所の雲）の方から、次第に上雲（高い所にある雲）の方へくれない色と光とが移っていきます。しかし、さらにしばらくたつて、夕やけがさめ始めると、そのくれない色と光が、今度は反対に、上雲から下雲へ、下雲へと移つて消えていき始めます。つまり上の方の雲から、次第に暗く黒くなつてしまふのです。そして、ついにはあれほどにぎやかで

美しかった夕やけが、どこにもあとかたも無くなつてしまひます。そのさびしさを表わすために、「夕やけがさつた」というように表現したのです。「下雲へ下雲へ」と同じようないよゝを重ねたのは、くれない色と光とが移つていくありさまを表わすと同時に、時こくが次第に移つていったことの気持をも表わそうとしたからです。「夕やけ」が夏の季題です。

うらがれにおとされ立てる子どもかな

「うらがれ」というのは、十月の末ごろに、草原や道ばたの草むらが、しもなどにうたれて弱つてしまつて、みんなひとかたまりになつて、からみあいながらたおれ、まだ、ほんとうにかれてしまつたのではないが、赤色や黄色やになっている、あれ

を言います。この句は二つか、やっと三つぐらいになった子供をおとうさんかなにかがだいて、町はずれの野原へやってきている場合です。草むらは、うらがれになって、草どうしが、かたまりあって、しき物のようになっていきます。きたなくないので、おとうさんは、子供の足に、持ってきたズックのくつかなにかをはかして、そのうらがれの草の上におろして、「立っち」をさせてやったのです。

まだおさなくて、今まであまり土地の上におりた事のない子供は、両手を半分ひろげたようになっこうをしながら、



おろされた場所に立ったまま、歩こうともしないで、なんだかおそろしいような、なんだかうれしいような顔つきで、おとうさんの顔をあいだり、ぐるりと見まわしたりしているのです。「子どもかな」となっているの、その子どものすがたが、この句の中心になっています。

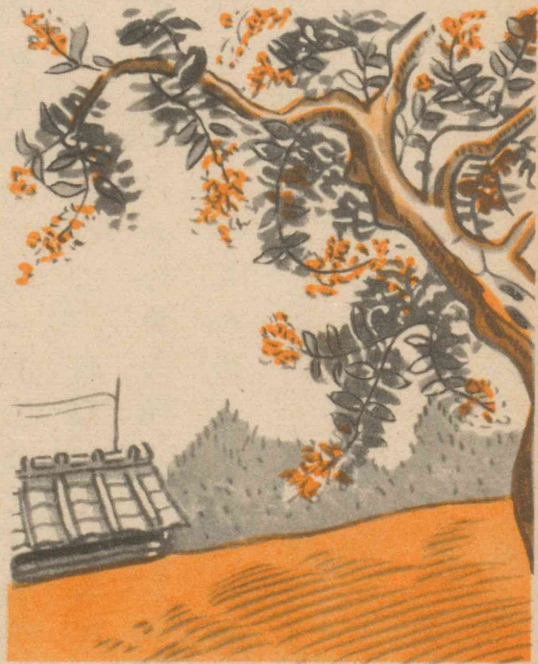
「うらがれて」が秋の季節です。

さるすべりラジオのほかにもなし

ただ「さるすべり」とだけ言ってありますが、ここでは、さるすべりの花をさしているのです。「さるすべり」は、寺の庭などによくある木です。そのみきがつるつるとすべっこいので、木のぼりの名人のさるだっすべってのぼれないだらうという

のでこの名がついています。六月の半ば過ぎから、かすかにむらさき色がさした赤い花（たまには、まっ白なものもあります）が木の全体にいっぱいさいいて、九月の末ごろまでさき続けます。この句をもしふつうの文章に書きかえるならば、「さるすべりだけが赤くさいている。ラジオの声だけがしていて、そのほかにはどこでも何の声もしていません。」となります。夏の真昼はいかにも明かるくてさかんなものですが、同時にいかにもしんと静かなものですね。この句もその時のことをよんだものです。目の前には、「さるすべり」が木一面さかんにたくさん花をつけていてにぎやかですが、同時にあの花の色はしいんとしていかにもしずかなのです。どこかで、つけっぱなしのラジオが、さかんに、高い声をたてていますが、「あれは機械がたてる声で、

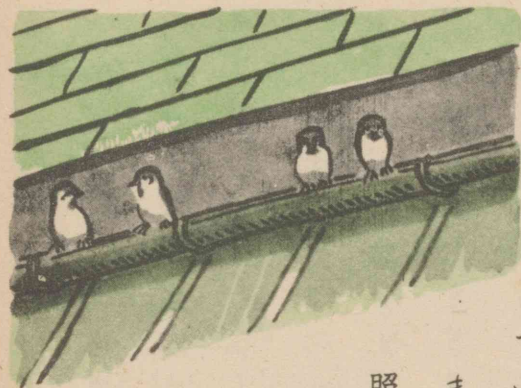
そこにはほんどの人間がいるのではない。」と違って、ふと耳をすますと、どこにも人間はみないなくなってしまうたかのように、人の声はひとつもせず、世間はただしいんとしずまりかえっているのです。「さるすべり」が夏の季題です。



まえ向けるすずめは白し朝ぐもり

「朝ぐもり」というのは、はい句以外ではあまりつかわないうこと

ばです。朝から天氣が悪くて、くもっているのを言うのではありません。夏の夜あけから、六時七時頃までは、暑さのためにまへのばんからの水じょう気が、大地の上に高くたまっていて、空までがなんだかくもっているように、白くて、どんよりとして



ていますが、やがて八時ぐらいになると、たちまち空はまっさおになって、日はかんかん照りつけだすのです。その夏の朝ごとに、きまって空がくもっているかのように見えて、いることを、「朝ぐもり」と言います。朝ぐもりの間は、すずめたちも気が重いのか、あまりかっぱつに飛びまわらないで、家の高いのきの雨どいなどに一列にならん

でとまっています。いうまでもなくすずめは、頭や、せや、おは、世間で「すずめ色」というように、あずき色のまじった茶色をしていきますが、ただむねやはらの方は白いです。この句は、朝ぐもりの時分に、少し遠方ののきに、前向きになってならんでいるすずめをこちらから見たら、みんな、むねやはらをこちらに向けているので、白い鳥がいるかのように、ならして白く見えたのです。空も白く、すずめのすがたも白く、いかにも、「朝ぐもり」の時らしかったという意味です。「朝ぐもり」が夏の季題です。

歩みくるむねのへにちようとびわかれ

春の真昼のけしきです。向こうから歩いて来る人は、男でも

女でも、おとなでも子どもでもいいのです。春の真昼に、明か
 る光を浴びて、ほがらかな顔つきを
 した人が、勢よくこちらへ歩いて来る。
 その前にちようが二つ、もつれあつて
 飛んでいたのですが、その人のむねが
 ぶつかりそうになったので、ちようは
 あわてて両側へ飛び分かれたのです。
 それで、まるでむねの中から二つちよ
 うをまほうで飛び立たせながら、歩いてくるかのようになり、きれ
 な、ありさまにながめられたのです。「へに」は、「べに」と読んで
 もいいので、「あたり」に」という意味です。「ちよう」が春の季題
 です。



(二) ひとふさのぶどう

「ひとふさのぶどう」は、大正時代の有名な作家
 有島たけおの童話の代表作です。

よこはま山手の学校に通っているひとりの気の
 弱い少年がありました。学校の行き帰りに見る海岸
 のけしきを、なんとかして見たとおりの美しさにえがきあげた
 と思います。すきとおるような海のあい色と、白いほ船
 などの水ぎわ近くにぬってあるよう「こう色」が、かれの持ってい
 る絵の具ではどうしてもうまく出ません。ところが同級生のジ
 ムという少年が、外国から輸入された上等の絵の具を持ってい
 て、そのなかのあいとようこうとが、特別美しいのです。少年

はそれがほしくてたまらなくなりました。が、気が弱いために、それと同じ絵の具を買ってくれとおとうさんにたのむこともできません。それでもほしくてたまらないので、とうとう、そのふた色の絵の具をぬすんでしまいました。

しかし、少年のぬすみは、すぐ知れてしまいました。かれは、ジムのほか、大勢の同級生たちに手あらく調べられました。いろいろでたらめな答をしたり、ていこうしたりしたのですが、ないません。ポケットにかくしておいた絵の具をひき出されてしまった上、無理に先生の所へ



引きずって行かれました。それは少年の大すきな女の先生でした。同級生の代表が、少年のしたことをくわしく先生に言いつけました。少し顔をくもらせた先生は、

「それはほんとうですか。」

とききました。少年は、この先生をごまかそうとは思いませんでした。けれども、自分が「そんなことをするいやなやつ」だということ、先生に知らせるのがつらかったので、ほんとうだと答えるかわりになきだしてしまいました。

しばらくだまって少年を見つめていた先生は、やがて他の少



年たちをみな帰してしまいました。そうして、少年のかたをだ
くようにしながら、

「絵の具はもう返しましたか。」

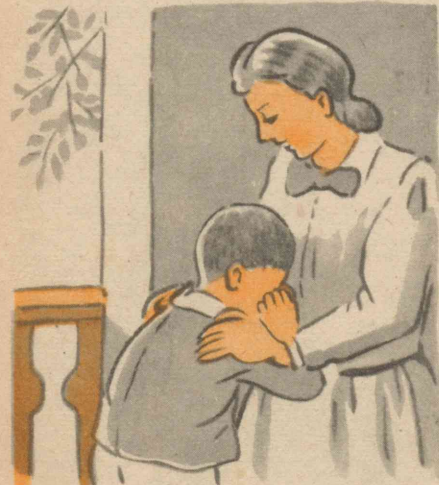
とたずねました。少年は「深々とうなずき」ました。

「あなたは自分のしたことを、いやなことだったと思っていま
すか。」

先生はもう一度静かにききました。

少年はもうこらえきれず、はげしく
なきじやくりました。先生にかたを
だかれたまま「死んでしまいたいよ
うな心持」になりました。

それっきり、もう先生は少年をし



かりませんでした。

「よくわかったらそれでいいから、なくのをやめましょう。」

そう言った先生は、へやのまどの所まではいあがっているぶ
どうのつるから、ひとふさの西洋ぶどうをもぎとって、それを

少年のひぎの上に置きました。

そうして、次ぎの時間の授業
のために、静かにへやを出て
行きました。少年には、授業
が終つて帰るまで、静かに待
っているようにとだけ言い残
して――。

ひとりになると、少年は、



「さびしくってさびしくってしょうがないほど悲しくなりました。すきな先生を心配させたことを思うと、「ほんとうに悪いことをしてしまったと思いました。ぶどうなどとても食べる気にはなれないで、いつまでもないていました」。

が、そのうちにたぶんなきつかれてしまったのでしょう。そのままねむってしまった少年は、先生にそっとゆり起こされました。先生はにこにこしています。ねむって気分が軽くなった少年も、そのえ顔を見て、はずかしそうにわらいかけましたが、すぐに悲しいことを思い出して、また暗い顔になりました。先生はやさしくそれをなぐさめて、少年を家に帰しま



した。ただその時、

「あすはどんな事があっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないとわたくしは悲しく思いますよ。きっとですよ。」

ということだけを、強く念をおすように言いました。そうして、少年のかばんの中に、それまで食べずにいたぶどうのふさを入れてくれたのです。



少年は、家に帰ってからそのぶどうを「おいしく」食べました。しかしあくる日になると、少年はなかなか学校に行く気になれませんでした。おなかがいいたくなければいいと思ったり、ずつ

うがすればいいと思ったりしたのです。けれど、どこも悪くありません。しかたなしに家は出ましたが、どうしても学校の門をはいることができないように思われるのです。

けれども、先生の別れのことばを思い出すと、行かずにはいられません。行かなければ先生はきっと悲しく思われるだろう。ついに少年は、思いきって、学校の門をくぐりました。

するとどうでしょう。まず第一に、ジムがとんできて少年の



手を取りました。だれも「どろぼう」がきたなどと悪口をいう者もありません。少年はなんだか気味が悪いような気持ちになりながら、ジムといっしょに先生の所に行きました。

先生はまずジムをほめました。そうして、それからふたりがよい友だちになるようにと、ふたりにあくしゆをさせました。

少年は、自分の悪かったことをあやまりもしないで、こんなふうに見えるのは、なんだか自分の方がかってすぎるように感じました

ので、もじもじしていましたが、ジムはいそいと少年の手を引っぱって、固くにぎりました。少年はうれしくてたまらなくなりしました。が、前からの関係がありますので、まだいくらかはずかしく思いながら、やっぱりにこにこしました。ジムはもういかにも氣持よさそうに、にこにこしています。

このようすを見ていた先生もにこにこしていましたが、やがてまた例のぶどうをひとふさもぎ取り、これをまん中から二つに切って、ジムと少年とにくれました。少年は、その時先生のまっ白い手のひらに、むらさき色のぶどうのつぶが重なってついていた、その美しさを、いつまでもわすれることができませんでした。前よりもよい子になり、少し「はにかみや」でなくなりました。

「ひとふさのぶどう」は、大体こういうことを書いた作品です。いうまでもなく、先生のやさしい愛が、主人公の少年を、「はにかみや」でない、「よい子」にしたことを主として書いたものです。それを少しむずかしいことばでいえば、「愛の力」がこの童話の主題であり、美しくておいしい「ひとふさのぶどう」は、その愛の美しさを表わすものになるわけです。

そういういい方はむずかしくても、先生の愛の力が、少年を「よい子」にしたことは、だれにもすぐわかるでしょう。はじめにジムやそのほかの同級生たちが、主人公の少年をきびしく問いつめたり、せめたりしていた時には、少年も、かれらにはんこうしたり、ごまかそうとしたりしていたのが、先生にやさしく

いたわられると、もうすぐすなおな正直な心になって、悪いことをしてしまったことをこうかいしているのですから。つまりおどかしや、ただのきびしさだけではできなかつたことを、やさしい愛情がりっぱにしとげているのです。そういう愛のふしぎな感化力のことが、この作品には、わかりやすく書かれています。と思います。

が、もう一つの方の、少年が「少しはにかみやでなくなつた」ということは、いくらわかりにくいかも知れません。そういう人は、その他にはほとんど何一つきびしいことをいわなかつた先生が、少年に「あすはかならず学校に来るように」ということだけを、強く念をおすようにいつているところに注意してください。

先生は、気の弱い少年が、あすになると学校を休みたくなるのを、よく知っていたのです。それで、強く念をおしたのですが、少年は果して学校に行くのがいやになりました。が、先生のことばがありますので、いやいやながらまんして学校に行つたのです。ジムはどんな顔をするだろう、他の同級生たちはどんな悪口をいうだろう、はずかしいな——少年はそんなふうに考えて、内心びくびくしていたにちがいありません。

ところが、実際は、それが意外な結果になつたので、すっかりうれしくなつたのですが、この経験から、少年は、はずかしいめにあわされはしまいかと思つて、とかくしりごみしたがる気持をおしきつて、強く生きること学んだのです。そうして、強く生きれば——ぶつかつてみれば、人生というものはぞんが

い、こわくもきびしすぎもしないものであるということを知ったのです。弱虫で神経質な「はにかみや」であった少年は、そういうことを発見して、前ほど神経質でも「はにかみや」でもない、強い人間になれたわけなのです。つまり、それだけきたえられたのです。

その点がわかると、愛というものは、ただやさしいだけのものではない、人をきたえあげる強さやきびしさをもふくむものであることが、しぜんにわかるでしょう。学校に必ず来るようにと、強く念をおした先生には、そういうきびしさもあったのです。それがあったからこそ、少年は強くなるようにきたえられたのです。こういうきびしさがないと、愛は、人をきたえるところか、かえって、わがままなあまったれの人間をつくって

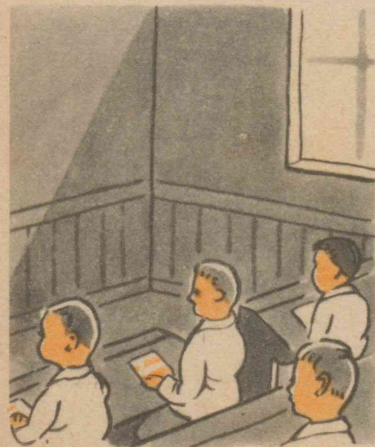
しまいます。

しかし、愛をそういうきけんなものにしないためには、きびしさだけでもいけません。きびしさだけだと、相手をかえってはんこうてきにさせたり、いくじなくいじけさせたりしてしまいうきけんも多いのです。わがままな、あまったれをつくらないと同時に、そういうはんこうやいじけた弱さを持たせないようにするためには、愛は、そのきびしさのなかに、相手の立場や心持をよく理解し、その人とその場合とに応じた適当な工夫をもつことが必要なのです。そういういたわりを察し、細かな心づかいをもって、主人公の少年をきたえていくありさまが、「ひとふさのぶどう」には、生き生きとえがき出されています。それが、この作品のねうちの一つになっているのです。

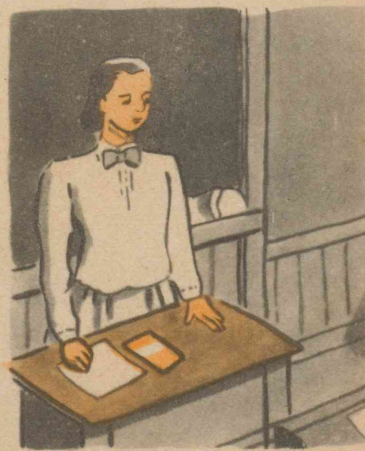
それからもう一つ、以上のような力と中味とを持つ愛が、相手を尊敬するといふ心の上に立っているものであることを、見落してはなりません。罪やあやまちを犯しても、いきなりその人を、悪いやつだとか、つまらぬ人間だとかいうようにきめてしまわない、つまり、人間というものをばかにしないのです。

「ひとふさのぶどう」の先生が、主人公の少年に、できるだけはずかしい思いをさせまいとしていることは、前のすじ書きからだけでもわかるでしょう。

先生が、ほかの少年たちをみな、先生のへやから出してしまったところなど、特にそういうことを強く感じさせます。



作品には書かれていませんが、少年をひとりへやに残していった先生は、少年のいない教室で、大勢の生徒たちにとぶんそういうことについて話したのでしょう。だから、ジムも、同級生たちも、少年の悪口を言ったり、はずかしがらせたりしなかったのだらうと思います。そういうあつかい方が、かえって少年に、自分の悪かったことを強く感じさせ、よい子に立ちなおさせたのだと思います。これがもし反対に、ジムや多くの同級生たちが、少年をいつまでも冷たい目で見たり、ののしかったり、こそこそと悪口ばかり言っていたりしたら、どうでしょう。



と同時に、このことは一方、愛される者の方にも、そういう人のあたたかい心にこたえるすなおさと同時に、はじめを知る心持がなければいけないことを、はっきりと感じさせましよう。「ひとふさのぶどう」の主人公は、白い手のひらに重なっているぶどうを、かぎりなく美しく感じたり、ジムのえ顔を、心からうれしく思ったりする、すなおな少年なのです。そういうすなおさがあったからこそ、少年は、この苦しくて、しかもうれしかった経験を生かして、「よい子」にもなれば、少し「はにかみや」でもなくなれたのです。その意味では、この「ひとふさのぶどう」は、先生の愛と少年のすなおな心とが一つとなって、美しい世界をつくり出したことを書いた、そういう作品だということにもなるわけです。

二 生産の喜び

(一) 造船所

電車をおりると、目の前に

造船所行きのバスが待ち構えて

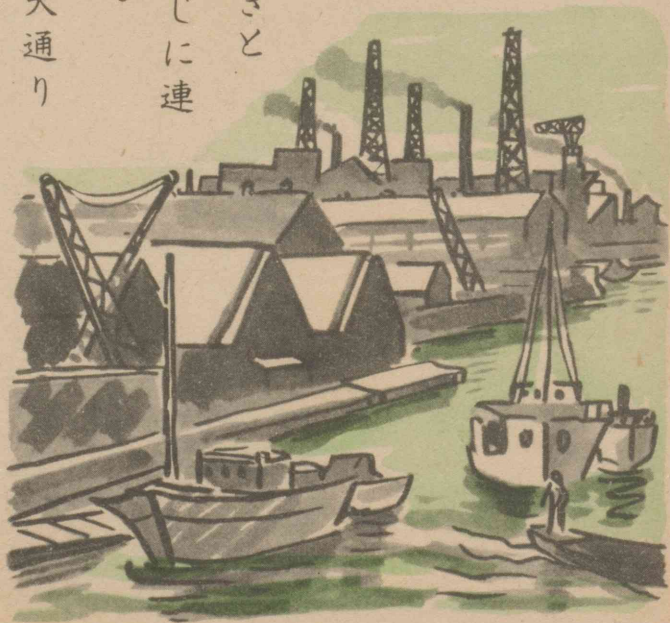
いる。元気な工員たちが次ぎ次ぎと

乗りこんで行く。私たちも、おじに連

れられてそのバスに乗りこんだ。

バスは、出発すると間もなく大通り

を左に折れて、海岸通りに出た。運がにかけられた木橋をわたると、あたりは広い草原が続いている。その向こうに、やぐら型





された。広い事務所の中では、大勢の人々がつくえをならべて、熱心に図をかいいたり、青写真を調べたりしていた。

大川さんは、へやのすみにある応接用のいすを、私たちに勧めながら、「ここは設計課といって、船の設計をする所です。造船所が船主から船の注文を受けると、設計課ではその船について、船体の長さ、はば、深さ、船内の設備、積荷の種類、船の速力など、さまざまのことを研究して、注文にあうように設計します。この設計図を船体線

の鉄どうが林のようにならんでいる。海のかおりをふくんだ風がまどからふきこんで、すがすがしい気持がする。長いへいにそってしばらく進んだバスは、工場の正門にピタリと止まった。車をおりると、せいの高い人が、

「やあ、白石君、しばらくでした。先日、お手紙をいただいたのでお待ちしていました。」

と、いかにもなつかしそうにむかえてくれた。おじの友人の大川技師である。

「おいそがしいところをすみません。おいのあきらと、同級生の村田君です。」

と言って、おじは私たちを大川技師にしようかいしてくれました。私たちは、大川さんに連れられて、工場わきの事務所に案内

図といひます。船の一生は、この設計で運命がきまるといわれるくらい大切なもので、たいへんむずかしい仕事です。ここで設計ができあがると、その設計図が次ぎの工場へまわされて、いよいよ建造にとりかかります。では、これから船がどんな順序で造られるか、工場をひとまわりしてみることにしてしましよう。

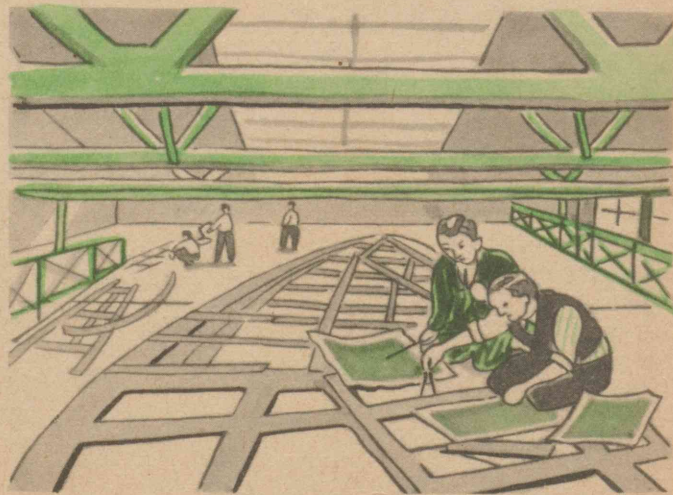
こう言つて、私たちを工場に案内された。

設計課のへやを出ると、そこに二階建ての大きな工場がある。外側についた階段だんをあがって、二階のへやにはいる。そこはまるで運動場のように広いゆか張りの工場である。この広いへやの中には、一本の柱もなく、四方のかべにはガラスまどをめぐらし、天じょうにもまどがあるので、すばらしく明かるい。

見るとゆかの上には、チヨークで一面に線が書きこまれ、その線に合わせて工員たちがうすい板を組み合わせて木のわくを造っているところであった。私たちが、ふしぎそうにながめていると、大川さんは、

「ここは原図場といひます。この工場では、設計課からまわされた船体線図の青写真や寸法書をもとにして、この広いゆかの上に、実物

大の船の展開図をえがきます。この図をもとにして、型板や、いもの用の木型などを製作するのです。ここでかけられる線図



は、実物大の船の形をはっきりきめるので、造船工事全体の基そになる非常に重要なものです。」と、説明された。

原図場を出ると、そこには造船所の広いしき地が海に向かってひろがっていた。海にそって、大きな工場がたくさんならんでいて、その間をぬうようにレールがいく条となく走っている。すみきった秋の空に、ひとときわ高い鉄のやぐらがそびえているのは、いかにも造船所らしい風景である。



私たちはその広いしき地を通りぬけて岸へきのそばまできた。そこには鉄板や鉄材が山のように積み上げられている。材料を船からすぐおろすことのできる場

所に材料置場が作られてあることがわかった。

その時、起重機がガラガラと音をたてて、材料置場の鉄板を軽々とつり上げて工場へ運び出した。

見ていた村田君が、

「すごい力だなあ。何人力ぐらいかしら。」
と言ったので、大川さんは、わらいながら、

「造船所ではこうした大きな材料を加工して、一つの船に組み上げるので、材料置場から各工場へ運んだり、工場で加工した材料を船台の上に運んだりするのに、運ばんの設備が大切です。ですから、工場の中には移動起重機があり、岩へきに

そって方々にうでつきの起重機が備えつけてあります。向こうに見える大きな起重機は八十トンぐらいの材料をつりあげることができます。——では、これから材料がどんなふうに加工作されて、船台に運ばれるか、そのようすを見ることにしましょう。

と言って、材料置場から次ぎの工場へ進まれた。

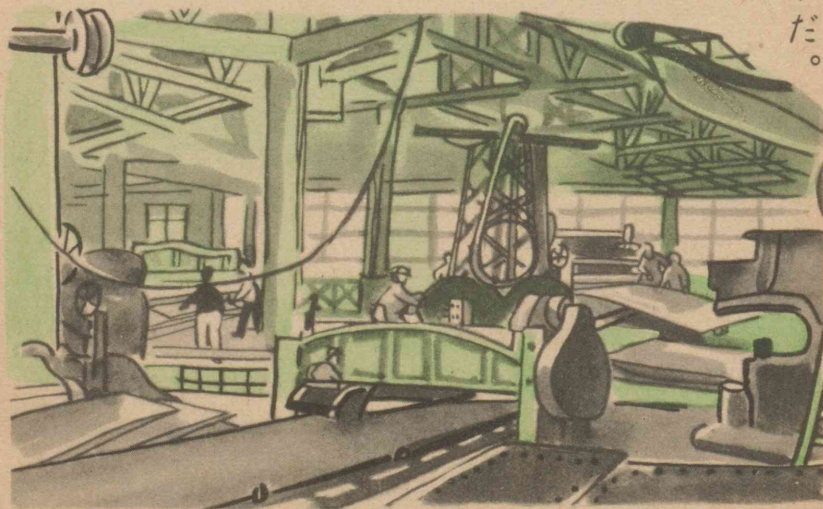
材料置場に続いて、天じょうの高く作られたおくゆきの深い工場があった。入口に近い所では、いま運ばれてきた鉄板に、原図場で作られた型板をあてて、さまざまの印を書き入れていた。

大川さんの説明によると、ここを「け書き場」といって、鉄板や鉄材の余分な部分を断ち切る印をつけたり びょうあなの位

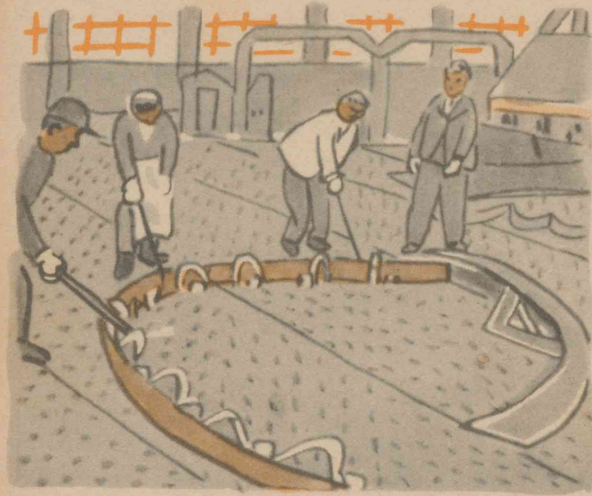
置や大きさを記入したりするのだそうだ。

け書き場でけ書きされた材料は、起重機で次ぎの工場へ運ばれて行く。私たちは、大川さんの後について機械工場の中へはいつて行った。

天じょうを移動する起重機の音、鉄板を切る機械の音、あなをうがつ音、それがいりまじって、大川さんの話も聞きとれないくらいである。私たちが工作で厚紙を断ち切るように、鉄板の不用な部分を断ち切る機械、びょうあなをあける打ちぬき



機械は、け書きされた場所を次ぎ次ぎと打ちぬいていく。すぐとなりの工場は、船体のろっこつを加工する焼き曲げ工場である。ゆかには無数のあなのあけられた厚い鉄板がしきつ



められてある。このあなを利用して、焼き曲げをするのである。工場のすみには、材料を加熱する大きなろが作られてある。

ろで加熱された材料をかぎで引き出し、あらかじめ用意された鉄板上でろっこつ材に適当な曲がりをつけるのである。

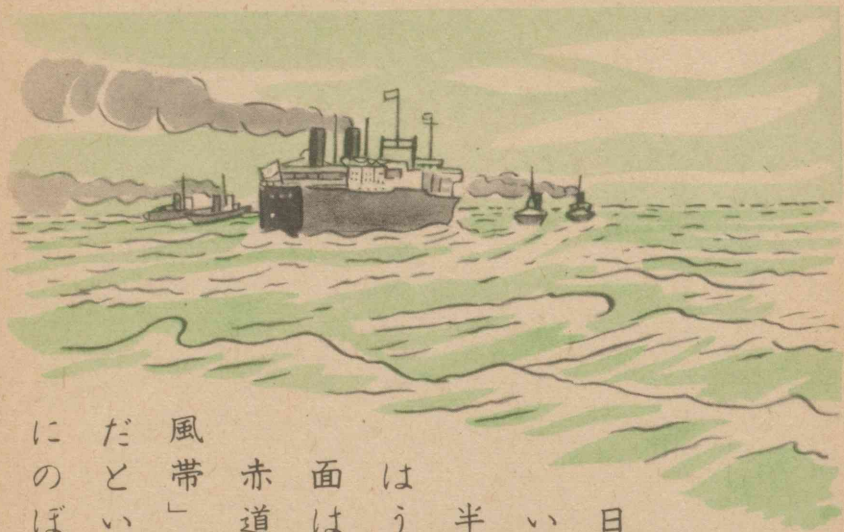
機械工場をひとまわりして、私た

ちは第一船台の前に出た。船台では、いま貨物船を建造中である。加工された鉄板が、移動起重機で次ぎ次ぎと運ばれてくる。

造船の作業は、ろっこつの組み立てを終って、今外板の取りつけ最中である。

工員たちは、起重機でつり下げられたびょう打ち機で、びょうを打つものもあれば、かなづちでカンカアンと打ちかためているものもある。高い足場の





(二) 南氷洋のほげい

内地を出て十二日めの、十一月十八日午前二時三十八分、私たちの乗っているほげい船団は、赤道を通過して南半球にはいった。目をさますと、太陽はうららかに照り、見わたすかぎりの海面はおだやかで、さざ波ひとつ立たない。赤道を中心に、南北約十度の間は「赤道無風帯」といって、このようなきがふつうだということである。気温は二十八度五分にのぼっているが、船が走っているために、

上で、仕事に取り組んでいるすがたはいかにも尊く感じられた。私たちが前にして大川さんは、

「この造船所では、今までカツオやマグロをとる漁船や、南氷洋で活やくするほげい船などを造りました。今造っている船は六千トンの貨物船です。この船が、日本の工場で造られたさまざまの物を積んで、外国の港へ向かうのも間近いことだと思います。その日を楽しみに、こうしてみんな熱心に働いています。進水式の日には、お知らせしますから、ぜひもう一度見学にきてください。」

と、親切にお話してくださった。

私たちは、あつくお礼を述べて造船所を出た。

そよ風があつて、それほど暑さを感じない。

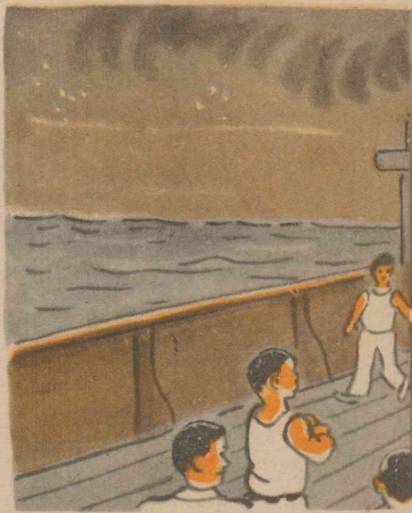
夕方、船橋のいちばん上にのぼってみると、海はどこまでもひろがつていて、すばらしく大きいまっかな夕日が今、水平線にかくれようとしている。白い綿のような雲がたなびいて、それがあかね色に、黄色に、またすんだむらさき色にと、次第にその色を変える。あざやかな緑色の海がうつり合つて、いかにもこうごうしいながめである。

ぼ色のせまるかんぱんでは、今夜も映写会が始まった。むしろを手に、作業員たちが集まってきた。去年、南氷洋でうつした天然色映画である。きれいな青い海と、純白の



氷山の群とが続いていて、じつに美しい。

南氷洋、南氷洋！ 私たちは希望にあふれるむねをいだきながら、その画面に見入った。

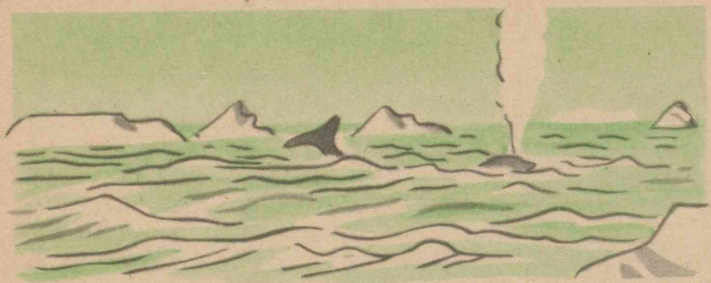
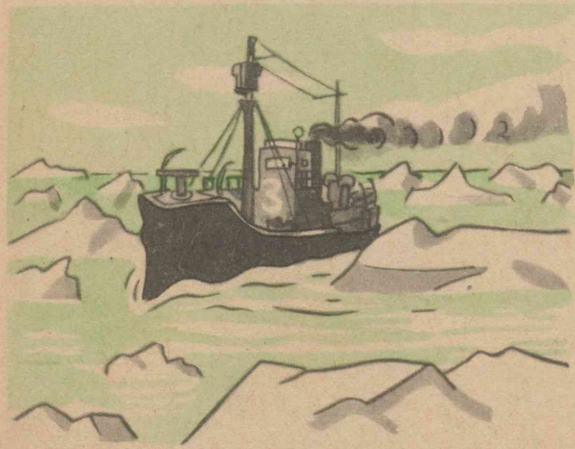


一月なかばのある朝、ふと目をさますと、船はエンジンの音も軽く走っていた。小さいまどからのぞくと、太陽はさんさんとかがやいて、すばらしい晴天である。元気よくはね起きた。砲手の山下さんが、
「早くかんぱんに出てごらんなさい。氷山の間にくじらが見えていますよ。」

ていますよ。」

と知らせてくれた。急いで船室を出て、かんぱんにあがった。船は、純白にかがやく群氷の間をぬって走っている。じつに美しい。手のとどくようなところに、はつきりと見える群氷は、この世のものとも思われぬほど美しい。船体のじょうぶなこの第三文化丸は、厚く張った氷をむぞうさに、ドシン、バリバリとつき破って進むので、この上もない壮快さである。はるか海面に、さあつ、さあつと大きな氷柱のようなしおがあがる。白ながすくじらのしおふきである。

「いるぞ、いるぞ。」



船橋にはきん張の色がみなぎる。船橋からほう台に通じるさん橋を、ゆうゆうと歩いていくほう手の山下さんが、

「あちらの『二本づれ』はえんりよして、左の『はなれ』に向かいますかな。」

と、いって、にっこりとわらった。

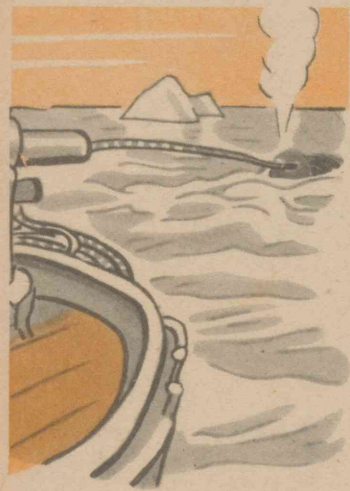
「全速力！」

船長が伝声管をつかんで、かみつくように号令をかけると、ドツドツドツドツと、急に高くなったエンジンの音に、船体は小さく身ぶるいしながら、ぐんぐん速力を増した。目ざす物にせまって、ぴたりと追いつちがまえになった。くじらは、近づき険を感じてか、しきりに、

しおをふいてもぐりこむ。右に左に、死にもものぐるいでにげまわる。

マストの見張りからは、そのたびに、「左かじ」とか、「右かじ」とか、いそがしくかけ声がかかる。すると、手がぐるぐるとハンドルをまわす。船首のほう台に立ったほう手は、手のあはずで、船のスピードを調節しながらたくみにくじらのうきあがる方へ、船をみちびいていく。

さあとうかんて、ぷうっとしおをふくくじらのすがたがしだいに目前にせまって来る。落ちつきはらったほう手は、足を大きく左右に開いて、引き金に手をかけ、じっとねら



いをさだめる。すると、目ざすくじらは急にもぐった。大きな水の輪が海面に残る。船はするすると、その右へ進んで、「イ」の字型にかまえる。息づまるようなしゅんかんである。くじらはうかんだ。ガンと耳をつんざくほう声。もりづなをつけたもりがいなずまのように光って、黒いくじらの巨体にぶすりとくい入る。命中、命中。

くじらはまた、さっと水にもぐる。すると、飛ぶようにそれを追って延びるもりづな、がらがらと回転するろくろ、ぐぐうつと曲がるばねじかけのかつ車。しばらくして、前方はるか数百メートルのあたりに、くじらはばかりとうかんだ。ふくしおは

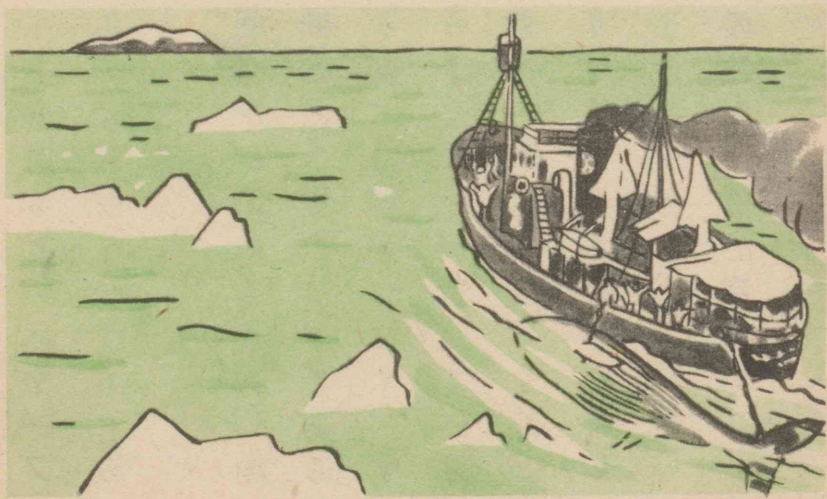
くれないの血にそまっている。また苦しげにのたうちながらもぐる。こうして、三度四度、もりづなをたぐっては延ばし、たぐっては延ばし、くじらの弱るのを待ってさらに引き寄せ、二番もりをはっしと打ち込む。三番もり、四番もりと、つづけざまにせめたてられて、さすがのくじらもしいにおとろえ、まっかな血しおをふきながら、息もたえだえになる。これを十分船べりに引きつけておいて、送気管をはらにつっこみ、ふ力をつけるための空気を送りこむ。ついに息の絶えてしまったくじらのおびれを、太いくさりて船べりにつなく。

キャッチャーボート（ほげい船）は、がい歌をあげて、母船へ帰って

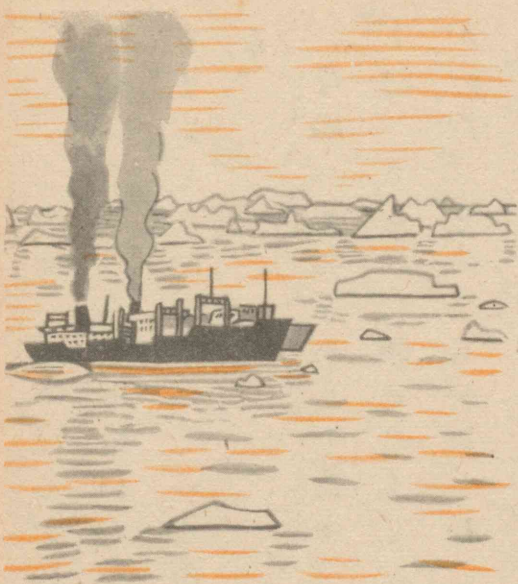


いく。この時、左方はるかに、氷雪をかぶったバツクル島が、きらきらとまぶしくかがやいているのが見える。

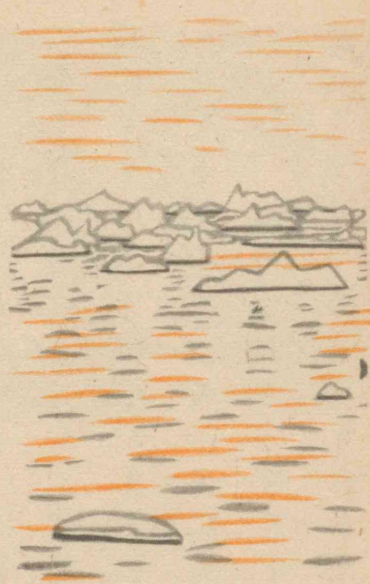
母船へえ物をわたしたキャッチャーは、さらに二頭めのくじらを追いかけた。そのころから、ねこの目のように変わりやすい南氷洋の気象はしだいにまたくずれて、波が高くなり、船ははげしくゆれ始めた。しかし、また前のような働きで、第二頭を得て母船にひきあげた。



この日の第三文化丸は、七十六フィートのおすと、八十一フィートのめすをとらえた。どちらにも、みごとな白ながすくじらである。



きのうのしけはすっかりないで、海面はかがみのように、赤道無風帯そのままのなぎである。見あげる空には雲一つなく、すきとおるようにかがやいている。はるか南の水平線には、しだいに北の方へ延びひろがった群氷が山のようにかさなりあっている。その純白の色が目にしみてまばゆい。



きょうは、このなぎを利用して、第二天洋丸との横付けが行われている。それは、二頭の白ながすくじらを、左右の船べりに流すことである。一万トンの巨船が二せき、ぴったりとならんだありさまは、まことに壯観である。

さん橋がわたされた。さっそく、両船の人々がたがいに訪問しあって、楽しい談話にふけている。たそがれの夕空には、ほんのりと三日月がかかり、しだいにそのかがやきを増していく。

午後十時ごろ、当直の人から、オーロラが見えていると知ら

せがあった。さっそく船橋へのぼってみる。三日月に照らされた夜の海は、ひっそりとして音もなく、あちこちにキャッチャーの燈火が、わびしくまたたいているばかりである。水鳥のむれが、時おりけたたましいはねの音をたてて、しんかんとした夜のしずけさを破る。まだねないでえをあらそっているにちがない。船のうしろのマストの上空を見あげると、青白い光線



がかすかにゆれている。それがしだいに集まって、百千の光のたばとなり、あるいは高く、あるいは低く、光の精がおどるように、音もなく燃え続けている。

極光！

極光！

この南のはての海に、今や、なぞの極光がそのすがたを現わしたのである。寒いのもわすれはてて、じっと船橋に立ちつくし、このふしぎな、しかもけだかい南氷洋の神びに、身も心もひきこまれていった。

三 日本のおもかげ

はしがき



あなたがたの家に、写真帳があるでしょう。そこにあなたのおとうさんや、おじいさんや、ひいおじいさんの写真が出ていますね。また、あなたの小さい時の写真も出ていませんか。

その写真帳をひろげて見ると、あなたの家の、むかしから今までの事がさまざまに見いだされてくるでしょう。なつかしさや、楽しさや、喜びなど、時には悲しみなども思い出されるにちがいありません。

今、日本のおもかげをうつした写真をかかげましょう。これを見ると、日本が生まれてから今までの事が、いろいろと思いつき返され、考えられます。さて、どんなおもかげが残っているのか、みなさんといっしょに調べてみましょう。

(一) 貝づか



ここに貝づかがあります。見たところ何の変わりもない貝ですが、今から四五千年も大むかしの貝なのです。

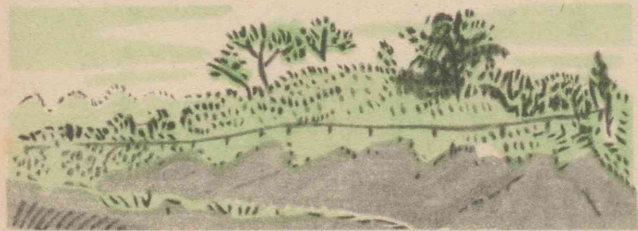
これまでに、そういう本に興味を持って読んだことのある人は、よく思い出しながら考

えてみてください。

貝づかから出る貝は、三百種類にもものぼりますが、この中で、アカガイやハマグリ、カキ、マテガイなどを古代の人は、たくさん食べていたようです。このほか、魚では、イワシ、サバ、マグロ、タイ、カツオなどを取って食べました。

このように古い時代のことが、はっきりわかる糸口となったのは、東京の大森の貝づかを発見してからのことでもあります。これを発見してくれた人は、モールヌさんというアメリカ人です。

(二) 石器・土器



ここに貝づかから出たものをならべましょう。石のおのがあります。石のやの根や石さじもあります。つりばりもあります。

これは、けだもののほねや角で作ったものです。古代の人々は、こうして、食物をとるためにいろいろ工夫したものです。一方その食物をたくわえるために、土で作ったつぼや、はちに入れて置きました。もちろん、水をくんだり運んだりする時にも使ったことでしょう。

つぼやはちに、なわ目のあるものをじょうもん式土器といい、ないものをやよい式土器といいます。

東京のやよい町で発見されたからです。

(三) はにわ

ここにおもしろい人形があります。手のもげたのや、足の無いのもあります。この人形は、はにわ人形といって、むかしの天皇・皇后をはじめ、身分の高い人がなくなった時に、墓におさめられたものです。はけ目のはいった、美しい赤色の素焼きの土人形で、高さ一メートルほどもあります。



このほか、馬や犬やにわとりなどをこしらえたのや、手首、むねなどにかざったまが玉、くだ玉、切り子玉などもたくさんあります。どこのどの墓からほり出されたのも、同じ種類のものであります。

これによっても、古代の人たちは、平和な共同生活をしていたと思われれます。

この、はにわ人形の顔も、いかにも平和な感じがするではありませんか。



(四) ゆめどのかんのん
この仏像は、やわらかい清らかなお顔で、人間の顔に見られ

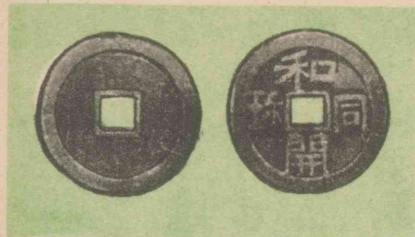
ないけだかさが現われています。

この美しいりっぱな仏像は、今から千三百年ばかり前、すでに私たちの祖先の手で作られたものであります。「ゆめどのかんのん」といって、今でもみんなから尊ばれている作品です。

(五) はじめての銭

日本の銭は、今から千二百年ほど前に、はじめて造られました。みなさんが今使っているいろいろな銭と、ずいぶんちがっています。

四角なあなのあいているところや、書かれている文字に注意してください。「わどうかいほう」と読みます。クロスワード・パズルのようですね。



お金が無かった時に比べて、お金ができてからの世の中が、どれほど便利になったかわかりません。

(六) びょうどう院

この建物は、いかにも落ちついた感じがします。これは、今から九百年前、ふじ原よりみちによって作られた、びょうどう院という建物です。その一部に、名高いほうおう堂もあります。

よりみちは、この世に清らかな仏の世界をひろめたいと思って、これを作ったといわれています。屋根の形や、左



右にのびたろうかのかっこうから、ほうおうの美しいすがたが現われています。

(七) やまと絵

絵のまん中に、大きなげたをはいた女が、お供をふたり連れていきます。この人たちの着物や、かぶり物なども、今のものとずいぶんちがっています。向こう側に店が見えます。かわ細工の店で、しかの毛皮がひろげてあります。くだものをならべたやお屋らしいのもあります。これは、やまと絵とい



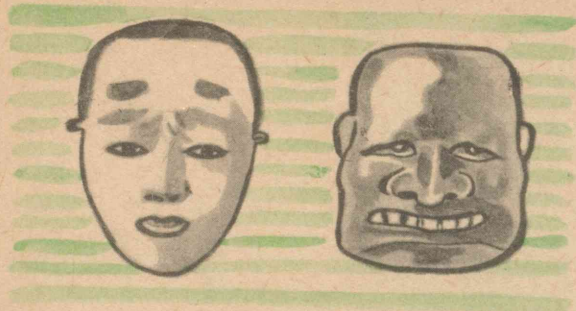
て、平安時代の町の風景をかいたものです。

(八) 絵物語

さあ、さあ、四つに組んだ大ずもう。かえるはうさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。うさぎはけんめいにこらえました。たおれそうです。たまりかねた二ひきのうさぎが、あとから大声で、手をふり足をふって、おうえんを始めました。

土ひょうは、はぎやすすきがさきみだれた秋の野原。これは、とばそうじょうという人が書いた、動物絵物語の一場面であります。





(十) 能面

これは面です。いったいどんな時代に使われた面でしょう。

「能」というおどりに使われたのです。

一つの面ですが、おどる人の歩き方や、身ぶりや、手ぶりによって、この面は、しぜんと血が通った生きもののように、いろいろな表情を表わします。むろまち時代の芸術品です。

んけいという人です。左はかいかいけいが作りしました。二つとも、かまくら時代の作で、なら東大寺の南大門にあります。

今度は、におう様。大きな目、のびた手先、しっかりふまえた両足、どこを見ても力があふれているではありませんか。

におう様は、寺の門に立って、仏様をお守りします。右のにおう様をほったのは、う



(九) におう様

かまくら時代の芸術としてりっぱなものです。さあ、うさぎが勝つてしょうか。かえるが勝つてしょうか。

(十一) イソップ物語

みなさんは、イソップ物語を読んだ事があるでしょう。イソップ物語は、イソップという人が書いたお話ですが、日

本に伝わったのは、三百五十年ほど前の事です。これが、そのころできた本の表紙です。

印刷機も外国からわたって来ましたので、かなりっぱな本ができました。日本のことばになおして、ローマ字で書いてあります。

外国から書物が新しくはいつてくることは、外国人の心が伝わることです。日本は、この心を受けてどんどん育ってきたのです。



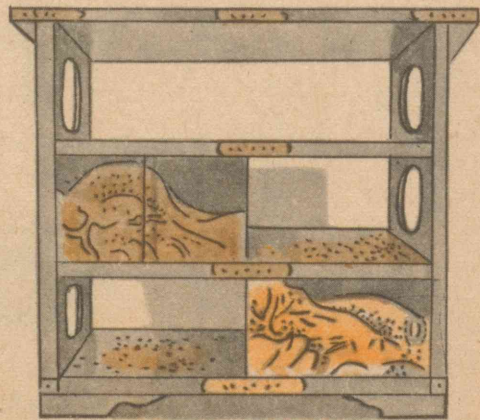
(十二) まき絵書だな

ちよつと見ると、茶だんすに似ていますが、茶だんすではありません。

徳川時代にできた、まき絵の書だなです。

まき絵というのは、うるしぬりのもよりの中に、銀や、なまりや、貝などはめこんで作ったものです。黒うるしの中に、銀や貝が光を放っているのは、何ともいえぬ美しさです。

まき絵は、日本のすぐれた工芸品の一つで、外国人にもてはやされてきました。



(十三) うきよ絵

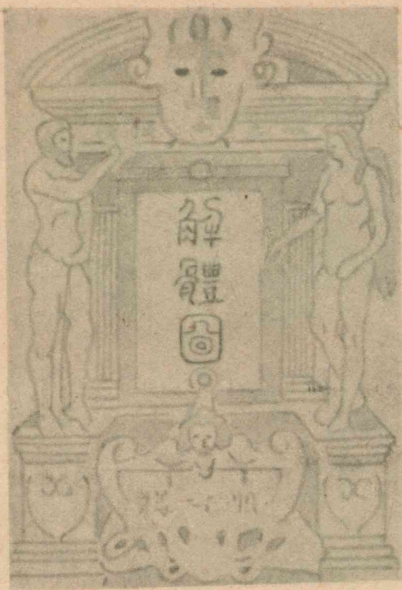
みなさんにおなじみの富士山の絵です。この絵は、ほくさいという徳川時代の人の書いたものです。

この絵は版画で、絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人との共同作品なのです。これをうきよ絵といっています。

三人がいっしょに心を合わせた美しさは、この通りりっぱなものとなって生まれたのです。



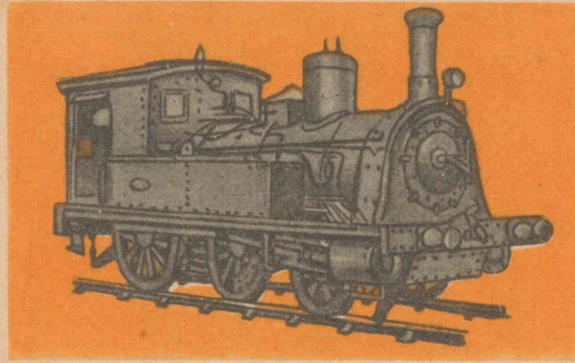
(十四) 解体図



これは、オランダの「ターヘル・アナトミア」という、人体のことを絵入りで説明した本を、今から百十年前に日本で出したものです。表紙の文字は、「かいたいず」と読みます。そのころまで、人間のからだはどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、この本ができてから、日本の

医学は、はじめてしっかりした土台ができました。この本を日本語になおす時、どれほど苦心したかわかりません。新しい学問をきりひらいていく時は、いつの時代でも、なみなみの努力ではなしとげられるものではありません。

(十五) 汽車第一号



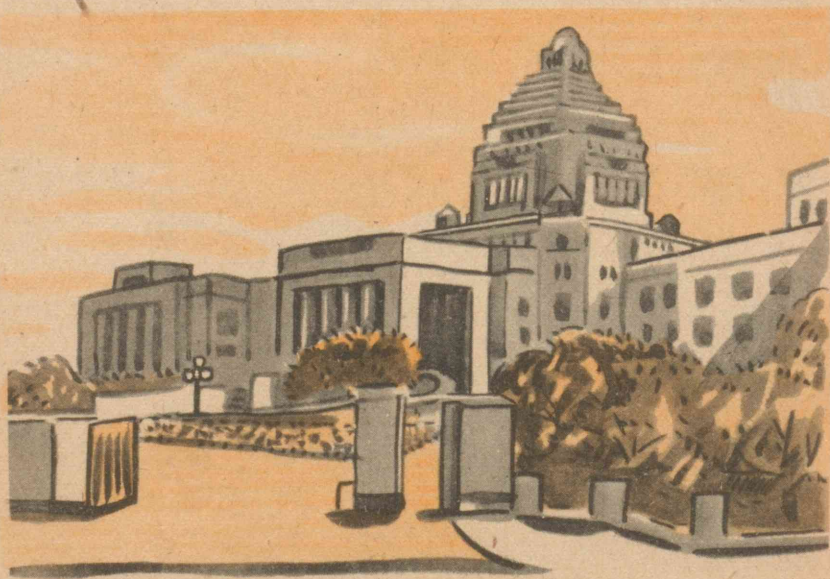
なんとかわいい汽車ではありませんか。これは、汽車第一号です。明治五年九月十二日、はじめて日本で、東京よこはま間を走ったのがこの汽車です。そのほか、明治七年に、大さかこうべ間、十年に、京都と大さか間の鉄道ができました。

今の汽車と比べて考えてごらんなさい。かなり変わっていきますね。汽車に限らず、船でも、自動車でも、飛行機でも、日に日に進歩していきます。そうして、遠い所も

近くなります。

(十六) 議事堂

これは議事堂です。みなさんたちの代表が、全国からここに集まってきました。平和国日本を作るために、文化国日本を築くために。新しく憲法が發布されましたが、この議事堂からたんじょうしたのです。



あとがき

これで、日本のおもかげを終わります。この長い道をたどってきた日本を、これからはどうもりたてていかなければならないでしょうか。

「民主主義」ということばを、ほんとうに生かしていくよりほかに道はありません。ことばを生かすということばは、身に行うことです。

あなた方の家も、これから、新しい目あてをもって、進んでいくでしょう。

あなた方がみんな歩調のそろった時に、はじめて日本が正しい美しい国となることができます。

四 ことばと生活

(一) 妹のことば

妹のかず子は、ぼくが三年生になった時生まれましたが、今は四オです。三年生の終りごろから、かわいことばを話しはじめました。

ぼくは日記帳のはしに、その日に聞いたことばを書いていました。少したまった時、夕飯のあとで、みんなの前で読みあげたら、みんなはおもしろいと言ってわらいました。それから、おかあさんも、ねえさんも、きょうは



こういったと教えてくれるので、もうずいぶんたくさんたまりました。

初めのころは、「バー」「マンマ」「アーチャン」「ワンワン」「ニャーニャ」「チンチン」「プープ」「テテ」「アンヨ」「カッコ」「クック」などででした。

そのうち、「アマイ」ということばをおぼえたのはよかったが、「からい」ときも「すっぱい」ときも、みな「アマイ」といって、顔をしかめるのです。

人がよそへ行くのを見送って、「行ってらっしゃい」というのを、「タッターイ」という声はとてもかわいいです。それで、みんなが、おとうさんにタッターイしましょうといっていたのですが、ある日、かず子がおかあさんにつれられてよそへ行くとき、「行つ

てまいります」というのを、自分で、「タッターイ」というので大わらいしました。

ぼくの五年生のころは、かず子は三オで、年上のお友だちとよくままごと遊びをしていました。そのかたことは、そばで聞いていてもおもしろいです。「ままごと」のことを「ママトト」、「りぼん」のことを「ピロン」、はさみのことを「オンチヨオンチヨ」、「あけてちょうだい」を「アツケチヨードイ」、「表へ行く」ことを「オンモクロー」です。

それからだんだん大きくなり、よく遊ぶようになりました。絵本を見てお話をしてもらうのが大すきでした。ぼくらの学校の学芸会へおかあさんにつれられてよくきました。すると、その夜はいつも歌の会です。かず子の歌は、「お手々つないで」が「オモテヌナイデ」になり、「山のお寺のかねがなる」が「ヤマ

ノオテラノネナル」になり、「でんでんむしむしかたつむり」が「デンデンムシムシカゼガクル」になるのです。その声が無じゃ気なので家中の人気を集めました。ぼくの五つのころ、ぼくは宮本武蔵と佐々木巖流の話を知るのが好きでした。ところがぼくは、「ささきがなりゆう」といえないで、「カタキ・キカンジユウ」といつてたのを、今でもおとうさんにわられます。四オになってからの妹は、ずいぶんいろんなことが言えるようになりました。けれども、そのことばづかいは、ぼくたちには思いつかないような変わったのがあります。

「だめだよ」といわれたとき、「ダメクナイ」と答え、「あぶないよ」といわれたとき、「アムクナイ」と答え、「キューピーさんある？」とたずねられた時、「キューピーさんある。ないわ」と答え

ます。また、あるとき、消しゴムでどうしても「消せない」とき、「ドウシテモケ。シラレナイ」といいました。

妹のしゃべっているのは何となくかわいいものですが、ぼくたちのことばとどこがちがいのかなど、ぼくは考えてみました。その第一は声やさしいことです。第二は舌のよくまわらないかたことです。第三は、何かことばがぬけていることだと、ぼくは思いつきました。

そして、ぼくらの英語も、アメリカ人が聞いたら、そんなものかなと想像するのでした。ことばの法則によくなれるまでにはだれでも同じことでしょう。



(二) いなかのことば

この間、PTAから学校の図書館へ、たくさん古い絵はがきが寄ふされました。その中に、あるとく志家が集めておられた、「お国なまり集」というアルバムがありました。

おもしろい絵のそばに、「お国ことば」の会話が書いてありました。ぼくはそれを少し手帳に写してきました。

かごしま

「ヨイ オテンキジャ ゴアハンカナ。」

(「いいお天気ではありませんか。」)

大さか

「キノウ サムウ オマシタナー。」

(きのうは寒うございましたねえ。)

名古屋

「ゴミヤース。」

「オイデヤース。」

「アーツイナモ。」

「フントニ、ドーニモ ナランギヤイモ。」

(ごめんください。)

(いらっしゃい。)

(暑いことですね。)

(ほんとにたまりませんね。)

長野県上田

「コーカキヤー アケーガ シビーズラ。」



(このかきは赤いけれどもしぶいだらう)

山形県

「ズロサ テンバダアゲ エガネガ」

(じろうさん、たこあげに行かないか)

お国なまりは、このほかにもまだたくさんありました。そして、その中に、「えどっ子べん」というのもありました。

「ケンチャン、マツテテヨ。スグダカラサ」

「ヤレダナ。イッチャウヨ」

「ジャ、イッチメー。アトカラ、スットンデクカラナ」

(健ちゃん、待っていてくださいよ。すぐですからね)

(いやですね。行ってしまいますよ)

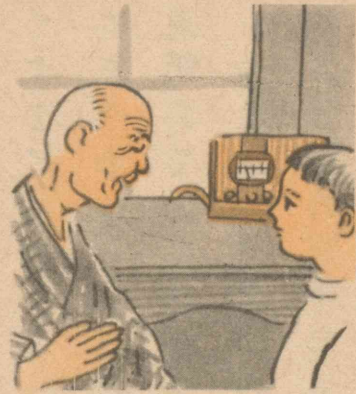
(それでは行きなさい。あとからとんで行きますからね)

よくみると、「えどっ子べん」というのは、ぼくたち東京に生まれた者が、毎日の生活に使っていることばです。そこで、ぼくたちのもやはり、「お国なまり」の一つかなあと思いました。

そこで、国語の時間に先生にたずねましたら、先生は東京生まれが、毎日の生活に使っているのは、その多くは「東京方言」ですよとおっしゃいました。そして、少しあらたまった言いかたをする時、または文章に書かれるようなのが「標準語」だと説明してくださいました。

つまり、ラジオの放送とか、講演とか、先生のお話なんかは話ことばの標準語で、新聞や一ぱんの書物に書いてある文章は書きことばの標準語なのです。それでも、その中には放送するとき「おひる」を「オシル」といったり、「お願い」を「オネ

「カエ」といったりする人は関東方言ですと先生が教えてくださいました。



ラジオでうたいの放送がありました。それを熱心に聞いていたぼくのおじいさんは、久しぶりに愉快だったとおっしゃいました。

ぼくは、「あのそらろろ、そらろろってなんのこと。」とたずねました。するとおじいさんは、「あれは、むかしのことばで、何々ですということだ。かまくら時代の人はだれもあれを使っていたのだよ。」
といて、いろいろな古いことばの話をしてくれました。子供

(三) むかしのことば

でも、そらろろを使ったのですが、ときくと、

「もちろんだよ。たとえばね、

「こちらへおいでそうらえ。」

「ただ今参りそうろろほどに、しばらくお待ちそうらえ。」

というふうに使ったのだよ。」とおっしゃいました。

それよりまえは、「はべる」とか「なり」を使っていたということですよ。

「そらろろ」を使わなくなってから、「ござる」「ごわす」「ごんす」ができて、それから「ございます」「あります」「です」になったのです。みんな、それぞれの時代の話ことばだったのです。それが古くなるよ書きものにだけ残っているから、それが「書きことば」というものだど、おじいさんは説明されました。

そこで、ぼくは、「今でもであるは書きものにだけしか使わな

いから、話ことばではありませんね。」とたずねました。すると、おじいさんは、「その通りです。であるはまるでひとりごとのような口調です。明治の半ばごろ、山田美妙びみょうという人があって言文いっちをとなえました。この人の書いた小説は全部でありまして書いてあった。」と話されました。

これからは、「はべり」「なり」「そろう」「ござる」とともに、「である」も、書きことばの世界にゆずって、話ことばとその記録とは現在の「であります」にしてしまったらいいがなあ、とぼくは思いました。

(四) 外国のことば

ぼくたちは運動場で遊んでいる時、オーケーとか、サンキユ

ーとか、グット・バイをよく使います。みんながいうから、いつのまにかおぼえてしまったことばがかなりたくさんあります。

それをよく知っておられる先生は、ある時、二日続きの休みのある前日、宿題を出されました。「君たちは、なかなかよく外国語を知っているらしい。この休日続きに、君たちがよく知っている『外国からきたことば』をできるだけ多く書いていらっしやい。みんなのを集めて一つの本にしましょう。」とおっしゃいました。

ぼくは家に帰って、いざ書こうと思うとなかなか思い出せないのです。インキ、ペン、ブックくらいをくり返しているうちに、野球を思いついて、ベース・ボール、ファースト、セカンド、サード、ピッチャー、キャッチャーというふうに全部書きました。

もっと書きたいと思って考えていると、にいさんが帰ってきて、「何をしてるんだ」とたずねますから、「宿題に外国からきたことばが出たんだ」と言いますと、「それならこの本を見ろ。」と出してくれました。

それは日本語になった外国語という本です。あけて見ると、あるある、いくらでもあります。ぼくはそのうちで、自分にわけのわかる語だけを書きました。ラジオ、オルガン、トーカー、テレビジョン、バイオリン、ピアノ、ラケット、ハンドル、ミルク、ナイフ、フォーク、アイス・クリーム、レコード、デパート、オーバー、ポンプ、コップ、ガラス、マッチ、ガス、ブラシ、シャベル、ボート、メートル、ホテル、テーブル、ゴム、ハンカチ、タイヤ、トンネル、ランプ、マント、コレラ、チフ

ス、マイル、コークス、ニッケル、セルロイド、ダイナマイト、アルミニウムなど、百以上になりました。

それから、その本を見ていると、平仮名や漢字で書いた別の部もありました。その中には、じゅばん、めりんす、もすりん、きせる、かぼちゃ、びろうど、かっぱ、たばこ、めりやす、とう、寺、だるま、だんな、ばか、びわなどもありました。

ぼくは、こんなのを外国のことばとして書いてよいのかどうかわからないので、別の紙に書いて学校へ持って行って先生にたずねました。

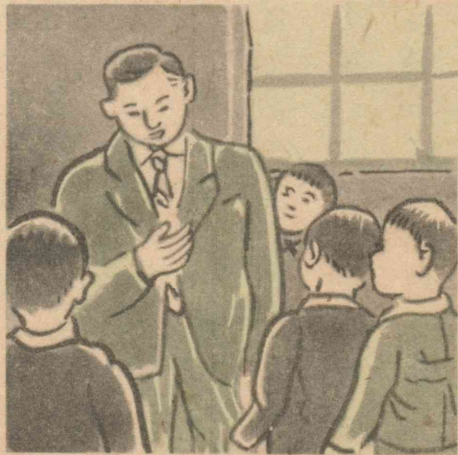
すると、先生は「それはよいところへ気がつきましたね。それらもみな外国からきたことばにちがいありません。ただ年代が古いので、今では日本のものになりきったわけです。それらは

おもにオランダ、ポルトガル、インドなどのことばですが、そのほかに中国からきたことばが何千というほどあるでしょう。漢字のじゆく語に気をつけて「らんなきい」といわれました。

それからぼくたちの組で集めた「外国からきたことば」は、どうしゃ版に刷って、一さつの本になり、みんなに分けました。その語数は二千ほどになりました。

先生は、「こんなにたくさん集まっても、まだ実際の生活に使われているほんの一部だ。」とおっしゃいました。

「それでは習うのがたいへんでしょう。」とだれかがききました。



すると先生は、「そんなことはない。社会で使われているといっても、それは医学とか、工学とか、宗教学とか、それぞれの専門の方面ですから、いったんの人がみんなをおぼえる必要はないことです。また新語というものも、どんどんできますが、一方でそれだけ古いことばが自然に使われなくなっていくから、全体においては大差ないと思う。」と言われました。

そうでしょう。そうでなければ人間がそんなにたくさんのことばを使いこなすことはできません。また必要もないことです。ことばはその時ごとに、人間の生活に必要なだけ、必要なすがたで現われて来ると信じます。

ぼくたちは、生活に最も必要な、そしてよいすがたのものをつかむようにしなければならぬでしょう。

五 ひとすじの道

(一) ベートーベン

音楽家にとって、一ばん大切な耳が聞こえなくなったら、どんなにこまることでしょう。それなのに、つんぼになっても、実にすぐれた音楽を作った人があります。それは、ルードウィッヒ・フォン・ベートーベンでした。

ベートーベンは、千七百七十年十二月十六日、ドイツの有名なライン川にそった、ボンという小さな町に生まれました。

父は宮ていつきの歌手でしたが、酒ばかり飲んでいました。そのころ、モーツァルトが評判になって、いるのをみて、自分の

子供にも音楽をしこんで金をもうけようと考え、四オぐらいから無理やりにピアノとバイオリンを教えました。ある時など、夜中によっぱらって帰り、ねているベートーベンを引きずり起こして、ピアノの前に何時間もすわらせたことがありました。

このように厳格に育てられているうちに、その天分はだんだんと現われ、八オの時に大勢の人の前でピアノをひき、十オで作曲を発表するようになりました。次ぎの年、ネーフェという有名な先生につくことができ、ぐんぐんと力をのばしました。たった十二オのベートーベンが、宮ていのオルガンをひき、あくる年にはげき場オーケストラのピアノをひき、十四オでは宮ていオルガンひきの助手となりました。このようにして、酒飲みの父の代りに、家のくらしを助けるようになったのです。

十七才の時、ウィーンへ行ってモーツァルトに会い、そこでもらった主題をもとに、りっぱな長い曲をひいてみせました。モーツァルトは非常に感心して、そばにいた人たちに、

「あの男に注意したまえ、いつかきっと世界をさわがすだろう。」と言いました。しかし残念なことに、いつもベートーベンをかわいがりなくさめてくれた母が、大病になったしらせを受けたので、急いでボンへ帰らなければなりません。かれにはたったひとりのやさしい母でしたが、ついにその年になくなりました。その悲しみはどんなだったでしょう。やがて父も、酒を飲みすぎてからだをいたため、仕事ができなくなりました。十九才にもならないベートーベンが、ピアノを教えたりして家をささえていかなければならなくなりました。



しかし、再びウィーンへ出る機会があったえられました。ハイドンやその他の先生について、熱心に作曲も勉強しました。その努力はついに報いられました。一か年の後には、ウィーン第一のピアノリストだと評判されるようになったのです。

二十五才の時に国王の前で演そうをし、次ぎの年にはあちらこちらと演そう旅行をして、広く名前を知られました。そのころから作品の出版を始めました。

こうして、やっとしあわせをつかんだと思ったころから、ベートーベンの第二の逆境が始まったのです。はじめははげしい耳鳴りがするだけだったのが、だんだん悪くなり、八方手をつ

くしましたがさらにききめはありませんでした。三十一オのころには、ついに万策つきて、もはやつんぼは日数の問題となりました。

ベートーベンには絶望の苦しみをなめたあげく、死ぬつもりで遺書をしたためました。しかしこの時、「運命ととっ組んで勝つのだ」という強い決心が、ベートーベンをとうとう立ち直らせました。

耳はほとんど聞こえないので、世間からはなれてひとりどこもり、つかれた時は近くの森を散歩したりして、命がけの作曲が始まりました。あの有名な「月光の曲」、バイオリンの「クロイツェルソナタ」、運命と人間との戦いを表わした「シンフォニー第五番」、田園の美しさをえがいた「第六番」、など、数々の

名曲がここで生まれたのです。

四十四オのころは、逆境にうち勝つことのできたベートーベンにとって、最も幸福な時代でした。自作の曲を富貴の人々の前で演そうし、ヨーロッパの光栄として各地にも招かれました。

ところが、この時すでに、第三の逆境がおそいかかっていたのです。次ぎの年には耳はまったく聞こえなくなり、ふだんの話はいちいち手帳に書かねばならなくなってしまうました。歌げき「フィデリオ」を演そうした時、指きをしてもオーケストラと歌手とがさっぱり合わないのに、ベートーベンにはそれがわかりません。たまりかねたでしのひとり、そのわけを手帳に書いてわたすと、ベートーベンは一言も言わずに家へ帰ってしまい、一日中いすの上にたおれていたという、気の毒なあり

さまでした。

その上、兄が、その子供のカールを、ベートーベンにたのんだまま、急に死んでしまいました。そのカールがまた、悪い事をして借金をつくり、ピストルで頭をうったのです。貧苦になやみ続けて、作曲もろくろくできないところへ、せっかくかわいがって大学までやろうとしていたカールが、この始末です。ベートーベンの苦しみは増すばかりでした。

心身のつかれは極点に達しました。からだはあちこちと悪くなり、貧苦は日増しにその度を加えました。しかしベートーベンは、こうした数々の不幸にもくじけませんでした。それどころか、かえって耳が聞こえなくなってから、この上もなくすぐれた作曲をしました。五つのピアノソナタ、最後の五つのげん

楽四重奏曲、それから、第四楽章にシルレルの「喜びの歌」のすばらしい合唱があるので有名な、「第九シンフォニー」などがそれです。この時期の名作は、作り方が非常に自由であり、また、ただ美しいというだけでなく、人間を愛するベートーベンの、深いあたたかい心が、音楽を通して私たちにしみじみと話しかけてきます。

「第九シンフォニー」の第一回公演の時、聞いていた人々は、我をわすれてはく手をおくりました。その興奮がいつになってもおさまらないので、ついにけい官が出てとりしずめたほどでした。中にはないている人さえありました。それなのに、指きをしていたベートーベンは、何もしりません。見かねた歌手のひとり、手を取って客席の方をふりむかせました。その時は

じめてベートーベンは、この公演会の大成功を知ったということだ。

そのうちにも、ベートーベンのからだはひどく弱ってきました。病苦をおして寒い冬旅行をしたのがもとで、とうとう重い病氣にかかりました。

千八百二十七年三月二十六日の夕方、おりからはげしい暴風雨で、かみなりは鳴りひびき、いなずまのきらめく最中に、とつぜん身を起こし、こぶしをにぎってふりあげ、五十六年の命を終ったのです。

ベートーベンにはせは低い、がっしりと太った人でした。額



は広く、かみは黒くていつもぼうぼうとしていました。目は小さく落ちくぼみ、悲しみをたたえていましたが、何事かが心にひらめくと大きくひろがり、生き生きとかがやきました。鼻はししのように、下口びるを前につき出してぐっとかみしめ、あごは強く、わらうとはげしいしかめつらになりました。身のまわりをかまわず、子供のようにむじゃきで、気にいらぬだけでもとなりつけ、おもしろいと大きな声でわらいました。やさしい心を持っていて、友だちがこまっていると聞くと、死のところからでも救いの手をさしのべました。また、芸術家としての自己を大切にする習慣と、自由を尊ぶ態度から、どんなに身分の高い人の前でも少しもへつらわず、相手からも必要以上に、いねいにされることをきらいました。

ベートーベンは、はげしい感情と、どんな不幸にも負けない強い心を持っていました。かさなる不幸といろいろな病気に苦しめられました。どこまでも強い心で戦いぬいて、そこに喜びを見つけました。世の中から喜びをあたえられなかった時は、自分でそれを作って世の中にあたえたのです。だからベートーベンの音楽を聞くと、心からなくさめられ、あすへの希望と活力とを奮い起こすことができます。

ベートーベンがなくなってから、百二十年あまりにもなりません。その間には何百何千の音楽家が出たのに、ベートーベンの名曲は、今でもさかんに世界中で演奏されています。それはなぜでしょうか。このことを、みなさんもよく考えてみて下さい。

(二) ミレー

ただきれいだという絵なら、世の中にはたくさんあります。しかし、人々の心を打つような絵は、めったにあるものではありません。ジャン・フランソア・ミレーは、長い間の貧しさや不幸とたたかって、苦しい修行をし、ついに自分の道をきりひらいたすぐれた画家でした。

ミレーは、フランスの貧しい農家に生まれました。小さい時からよく働きました。そのころから絵がだいすきで、ひまさえあれば木炭画をかいていました。父は早くからミレーの画才に注目していました。けれども、家の貧しい上に九人もの子供をかかえていては、いい先生につかせることなどとてもできません。

ん。こうしてミレーが二十才になったある日のことでした。弟たちもそれぞれに大きくなったので、父は思いきってミレーを連れて、シエールのムシエルという農民画家の所へ行きました。ムシエルはミレーの木炭画をひと目見て、その画才のすばらしさにおどろきました。そうして父に言いました。

「どうしてあなたは、こんなに長い間引き止めておいたのです。この子には、大画家になる素質がありますよ。」

この時からミレーの絵の勉強が始まりました。しかし、かれがシエールに行くの間もなく、父はのうまくえんにかかって死にました。絶望と、家のあとをつく責任とで、シエール行きをあきらめようとしたミレーを、祖母や母がはげまし、再び出発させました。やがてラングロアの門に入り、ますます修行

を重ねました。ラングロアはミレーの熱心さと進歩のすばらしさにおどろき、パリへ出て勉強ができるように、町からの補給金を願ひ出してくれました。

いよいよ、美術の町パリへ出発しました。パリの画じゆくにおけるミレーは、いなか者でむっつりやのためにおしやれでぜいたくなパリっ子の絵友たちからは、いつも話せないやつだとばかりにされていました。しかしミレーは、自分がいなか者であることを、少しもはずかしいとは思いませんでした。貧しくても気位の高い、りっぱないなか者でした。絵友たちはかれのことを、「森のやばん人」とか、「木ぐつをはいた神さま」などとかかいました。この「森のやばん人」は、時々すばらしい絵をかきました。そのころ一流の画家であったドウラロツシュとい

う先生は、ミレーの熱心な勉強ぶりに、早くから目をつけていました。そしてじゆく生たちに、いつもミレーの絵をほめて話しました。しかし、あるきまった型にはめて、むかしから少しも変わらない題材ばかりをくり返しているような画風は、ミレーにはがまんができなくなりました。

思いきってドウラロツシユの画じゆくを去ったミレーは、それからは、あちらこちらの研究所に通ったり、ルーブルの美術館に出かけたりして、ひとりて絵の勉強を続けました。ところが運の悪いことに、ラングロアの世話してくれた学費がぱったりとだえてしまいました。生活は急に苦しくなりました。かれは絵を売って勉強を続けようと決心しました。しかし、ミレーのかくようなまじめな絵を買う人など、ひとりもありませんでした。そこでしかたなく、安い値で似顔絵をかきました。その金を受け取っては近くの飯屋に行き、すいたはらをやっと落ちつかせるのでした。

こうしている間にも、まじめな絵の勉強をやめませんでした。画布を買う金がなければ、一度かいた絵をぬりつぶして、その上に新しい絵をかきました。こうして二十五才の時には、フランス第一の美術展らん会であるサロンに出品して、入選するまでになりました。やっこのことで一人前の画家にはなったものの、生きていくためには、相変わらず似顔絵やかん板をかかねばなりませんでした。

十年あまりの苦しい修行が始まりました。最初の妻は、その苦しいなかに死んでいき、二度めの妻との間に、ふたりの子供

がございました。妻はミレーをはげまし、子供たちを守り続けました。

千八百四十八年の二月、フランスに革命が起こりました。その新政府によって開かれた展覧会に、ミレーは二つの絵を送り二つとも入選しました。特に「みをふる人」という絵は、たいへんな評判をとりました。青いシャツ、赤い首まきのひとりの農夫が、なやで、穀物をふるっている図でした。かざりけのない農夫の生活をえがきたいというのが、ミレーの長い間の願いだっただけです。この絵は、たちまちパリのうわさとなりました。しかし、自分の絵が世間の評判になっていく時、その作者は、貧苦のどん底に落ちていました。食べるものも何一つなく、燃やすすまきもなく、寒さにこごえていました。これを見かねたととなり

の人が、ミレーの友人にこの事を知らせました。友人はおどろいて、さっそく美術院長の所へとんで行き、わずかの金をもらいうけて、大急ぎでかれの家へやってきました。

「こんばんは。」

よんでも返事がありません。

見るとミレーは、火の気のない暗いへやのかたすみ、トランクにこしをおろしてうずくまっています。身動きもしません。友人はかけ寄ってその手を取りました。

「ミレー君、いったいどうした





「どうなのだ。どうして、こんなになるまでだまっていたんだ。さあ、ここに金がある。君がもらってもいい金だ。」
友人はそう言って、ミレーの手に金をおしこむようにしました。
「ありがとう。」

ミレーはやっと顔をあげ、重そうに口をききました。

「いい所へきてくれた。じつはぼくは、もう二日間なんにも食べないでいる。子供たちに苦しい思いをさせてはならぬと、それが何よりの心配だった。さいわいきょうまでは、あれたちの小さな胃ぶくろをみたすだけはどうやらあった。——あ

りがどう。これで助かった。もらっておくよ。」

そこで妻をよんで、金の一部をわたすと、ミレーは大急ぎでまきを買いに出かけました。

そのあくる年のことでした。

ある夕方町を歩いてみると、ふたりの男が町角の店先で立ち話をしていました。ミレーは、何気なくそれに耳をかたむけました。ふたりは、そこにかざってある絵の悪口を言っていたのです。ミレーははっとしました。それは、四五日前にかれが売った絵でした。ミレーは息が止まるような思いました。その日その日を生きていくために、しかたなくかいたあの絵を、世間の人々は、このようにふまじめだとののしるのです。その時ふと、祖母や母のことが心にうかびました。自分がこうしてすきな道

には入れたのは、あの時、あのやさしい祖母や母のはげましがあつたからではないか。たよりないさびしさをがまんして、自分をバリに出してくれている母たちが、このような評判を耳にしたら、いったい何と思うだろう――。

ミレーはもう、じつとしていられなくなりました。とんで家に帰ると、妻にそのことを話しました。

「お前さえ承知なら、私はもう二度とああいう絵はかかないことにする。そうすれば、生活はもっと苦しくなるし、お前もさぞつらい思いをするだろう。けれども、私は自由になれる。カいっぱいの仕事ができるのだ。」

妻はだまって聞いていました。やがてしずかに、でもきつぱりといいました。

「私のことならちっとも心配はいりません。どうぞ、あなたの方よろしいようになすってください。うちのことは、どんなにでもしてやってまいります。私は、どんな事でもがまんいたします。」

間もなくミレー夫婦は、子供たちをつれてバリを去りました。ハルビゾンという、小さな村に落ちつきました。そこでかれは、生まれ変わったように絵筆をふるい始めました。かれは今こそ、ほんとうに農民画家になったのでした。

千八百五十七年に、あの有名な「落ぼ拾い」を出品しました。その他の名作も次ぎ次ぎと入選しました。

ミレーの絵の真価は、ようやく全世界の人々に認められました。どんな人の心にもふれる真実がかがやいたのです。

ミレーの絵には、年取ってもまだ働かねばならない老人が、



せぼねもまがるほど重いまきのたばをしよつて、歩いていきます。わかい農夫が、どろだらけになって畑を耕しています。またある時は、夏のえん天に、あせにまみれて種まきをしています。わかい女たちも、そまつな着物を着てひつじの番をしたり、まきを拾ったりして働いています。ミレーのかいた絵は、しみじみと私たちの心にふれてきます。ミレーの絵には、真実

がこもっています。

ミレー一家の長い貧苦の生活が、ようやくしあわせを取りもどそうとした時、ミレーのからだはつかれはてていました。病気は急に重くなり、千八百七十五年一月二十日に、家族の者に見守られて、ついに息を引き取りました。その数日前に、犬に追われたあわれなしかが、ミレーの家の庭へにげこんできて死にました。しかは、ミレーの死の道連れとなったのです。人間の真実を愛し、誠実に働く貧しい人々の味方であったミレーに、神はしかを道連れにつかしたのでした。

ミレーの多くの名作は、ただ今では、人類のたからの一つとして、ルーブル博物館をはじめ、あちらこちらの博物館に大切に保存されています。

六 人類のゆめ

もともと、人間は平和が好きです。それで、どのようにはげしい戦争があるときでも、たいていは平和を唱えながら戦争をしています。平和運動の一つであるユネスコにしても、実は戦争中に生まれました。

それは千九百四十四年のことです。ロンドンで連合国の文相会議が行われ、その時、アメリカの教育団がもちだした世界平和のための教育というのが、大歓迎をうけました。その後、イギリスの女文部大臣であったウイルキンソンが世話役となって、ユネスコは生まれたのです。

ウイルキンソンのことばに、

「どこかに無ちがあれば至るところがき険」。

という名句があります。戦争というものは、つまりどの国かの無ちから始まるのです。また、ウイルキンソンは、

「無ちは相みたがい」。

とも言っています。つまり、けんかはひとりではできないから、相手になったものも無ちのなかまということになるのです。

そこで、世界から「無ち」を無くしようというのが、ユネスコなのです。逆にいうと、世界をみんなおたがいに教育しあって、りこうになろうということです。そして、この「無ち」という



意味には二つあります。一つは学問をしないための無ちで、もう一つは学問をしても戦争を悪いことと思わない無ちなのです。前の無ちはだれでも知っていることで、後の無ちについては日本が、こんどはじめて、しかも世界一によく知りぬいたことでしょう。その現われの一つは、いうまでもなく新憲法です。戦争を絶対にしないと書いた憲法をもっているのは日本だけです。平和のためユネスコ運動をおし進めている国は、世界に五十以上もあります。そのうちでも、アメリカは千九百四十六年の七月に、トルーマン大統領が、上下両院の決議した合衆国のユネスコ参加書に、賛成のしよ名をしています。

ユネスコの精神からいって、その運動でいちばん大切なのは「情報」ということです。世界がりこうになるためには、世界の

あらゆるでき事を、一つももらさず、世界のすべての人々が知らせ合うことが大切になるのです。

トルーマン大統領は、右のしよ名のときに声明しました。「全人類の精神が、無ち・へん見・疑いおよびおそれから解放され、あわせて正義・自由および平和にむかって教育されますように」と。

つまり、情報をもたないと無ちになるし、かたよった考え方をし、相手を疑ったりおそれたりするようになり、ついには正しいことや自由や平和さえもわからなくなるというのです。

みなさんは、ユネスコの宣伝ポスターに注意されたことがありますか。ガラスのようにすき通った地球の絵です。これこそ完全な情報につつまれた世界をよく表わしているではありません。

んか。

ラジオ・トーキー・テレビ
ジョン・レントゲン・えい画・
望遠写真・新聞・雑誌・その
他、ありとあらゆる科学を動
員して、分秒をあらそって、
世界のどこか一か所のでき事
が世界の全面に知らされると
したら、もはや疑うこともお
それることも無くなるでしよ
う。同時に、悪いたくらみも、おそろしいひみつももつことが
できなくなるでしょう。



今はまだ、ユネスコに参加しない国があるといふことが、そ
れをはばんでいるのです。

したがって、地球はまだ全部がすき通ってはいません。ほん
とくに、北極から南極まで全部がガラスのようにすき通ったら、
どんなにすばらしいことでしょう。その時こそ、全世界の人類
がまくらを高くしてねむることができ、昼も夜も心地よい楽園
となる日です。

——これが人類の大きなゆめの一つ。

七 卒業の日

「春」の音楽、しずかに。

男 一 花、花、花。

女 一 ちようちよ、ちようちよ。

男 二 鳥、鳥、鳥。

全員 春、春、春。

男 三 喜びをここに集めて。

女 三 今ひらかれる私たちの卒業式。

全員 卒業式。

男 一 校長先生。

女 一 諸先生。

男 二 来ひんのかたがた。

女 二 おとうさま、おかあさま。

男 三 在校生の諸君。

女 三 式場をうずめて。

男 一 わきおこる喜びの声々。

全員 喜びの声々。

女 一 感謝の気持にふくらむ。

男 全員 ぼくらのむね。

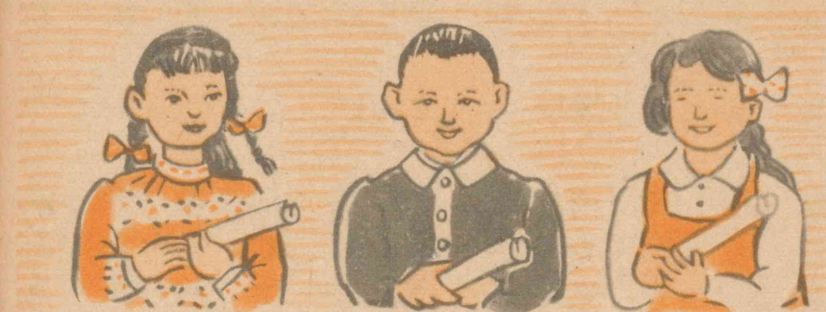
女 全員 私たちのむね。





男 三 校長先生。
 女 三 諸先生。
 男 一 一年、二年、三年。
 女 二 四年、五年、六年。
 男 全員 六年の長いとし月。
 女 全員 六年の長いとし月。
 男 一 身にしみるそのじ愛。
 全員 そのじ愛。
 男 全員 山より高いその恩。
 女 全員 海より深いその恩。

「はとぼっぱ」の音楽



男 二 見てください。
 女 二 だきしめた卒業証書。
 全員 卒業証書。
 男 三 希望に燃ゆるほお。
 女 三 ほこりにかがやくひとみ。
 男 一 これこそ、少年の日の最大の栄よ。
 全員 最大の栄よ。
 女 一 うれしいのです。
 全員 うれしいのです。
 女 二 ありがとうございます。
 全員 感謝です。



男 二 なつかしい学校生活の思い出。
 全 員 なつかしい思い出。
 女 二 思い出の、まわりどうろう。
 全 員 まわりどうろう。
 男 三 春の遠足。
 女 三 山登り。
 全 員 山登り。
 男 一 あせをふきふき、ラララララ。
 男 全 員 ラララ、ラララ、ラララララ。
 女 一 つえにすがって、ラララララ。
 女 全 員 ラララ、ラララ、ラララララ。

男 二 思い起こす一年生の日。
 全 員 一年生の日。
 女 二 雨の日にぬれてないのは、私でした。
 男 三 雪の日に、こごえて歩けなかったのは、ぼくでした。
 女 三 あらしの日に、かさをとばしたのは、私でした。
 男 一 いつもやさしかった先生。
 全 員 いつもやさしかった先生。
 女 一 いつも学校は春でした。
 全 員 いつも学校は春でした。

小鳥の声



男 三 夏の臨海学校。
 女 三 海水浴。
 全 員 海水浴。
 男 一 ドーンと寄せる波。
 男 全 員 ドーンと寄せる波。
 女 一 サーツとひく波。
 女 全 員 サーツとひく波。



女 一 わすれられないお弁当の味。
 全 員 弁当の味。

波の音

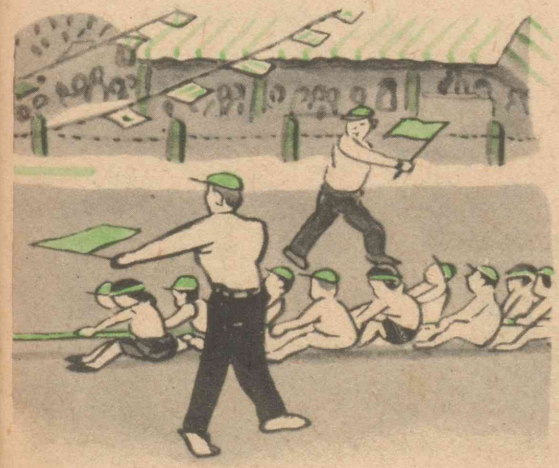
男 二 道は険しい石の道。
 女 二 リュックは重い、石の道。
 男 三 上着をとってひと休み。
 全 員 ひと休み。
 男 全 員 オーイ。
 女 全 員 オーイ。
 男 一 がんばれ——、もうすぐちよう上だよ——。
 女 三 すぐ行くわ——。
 男 全 員 エンヤコーラ。
 女 全 員 エンヤコーラ。
 男 二 山のちよう上、見はらし台。
 全 員 見はらし台。



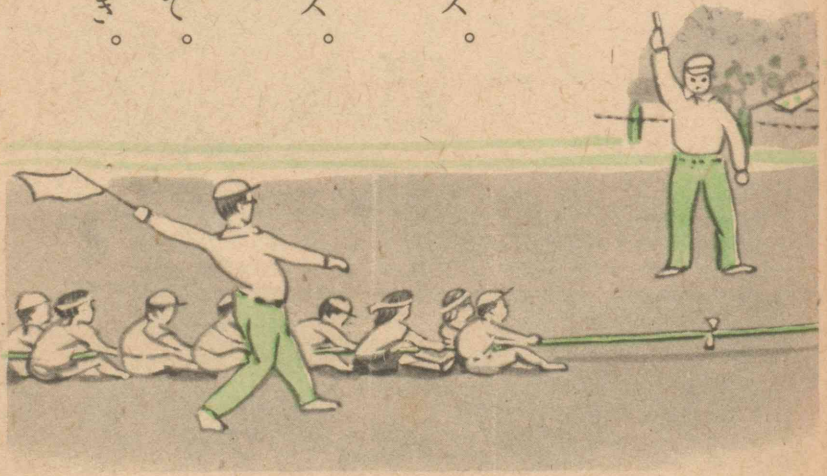
男 二 ぬき手をきって遠泳。
 女 二 波乗り遊び、すな遊び。
 男 三 黒さをほこるみんな海の子。
 全 員 みんな海の子。

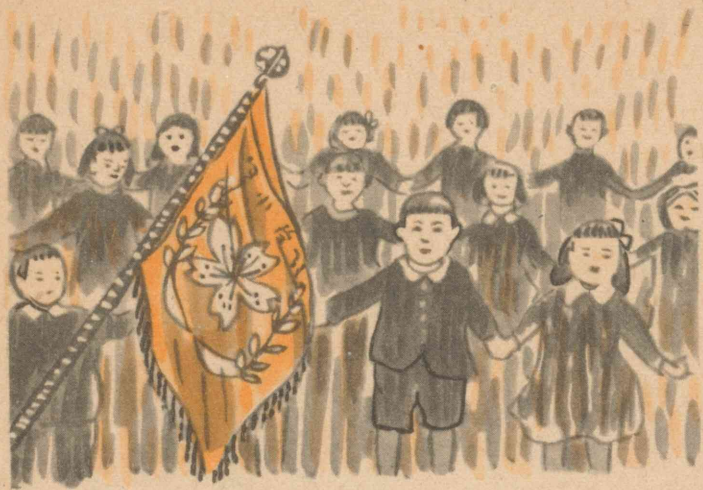
ベルの音

男 一 秋のスポーツ。
 女 一 運動会。
 全 員 運動会。
 男 二 二人三きやく、玉入れ比べ。
 女 二 全校あげてのつな引き競争。



男 三 赤、勝つように。
 男 全員 赤、勝つように。
 女 三 白、勝つように。
 女 全員 白、勝つように。
 男 一 赤勝て、オーエス、オーエス。
 男 全員 オーエス、オーエス、オーエス。
 女 一 白勝て、オーエス、オーエス。
 女 全員 オーエス、オーエス、オーエス。
 男 二 全校リレーのテープを切つて。
 女 二 わらつて、ないて、だきあつて。
 男 三 空にひびけど、あげたかちどき。
 全 員 あげたかちどき。





全員 思い出の国。

男 一 在校生の諸君。
 女 一 在校生のみなさん。
 男 二 手をつなぎ。
 女 二 手をつなぎ。
 男 三 声を合わせて。
 女 三 声を合わせて。
 男 一 共にかかげた校旗には。
 女 一 いつも流れた。

静かな音楽

はく手

男 一 冬の音楽会。
 女 一 芸能会。
 全員 芸能会。
 男 全員 ドレミファソラシド。
 女 全員 ドレミファソラシド。
 男 二 人形しばいのピョンピョンうさぎ。
 女 二 コンコンぎつねの紙しばい。
 男 三 チルチル、ミチル、青い鳥。
 女 三 みんななつかしい思い出の国。



男 二 自治、自主のそよ風。
全 員 自治、自主のそよ風。
男 三 あすからは君たちの手で。
女 三 あなたたちの手で。
男 一 旗をかけるのだ。
全 員 旗をかけるのだ。

ほたるの光の音楽

男 全 員 幸福の学校。
男 二 校長先生のご幸福をいのります。
女 全 員 ほまれの高い学校。

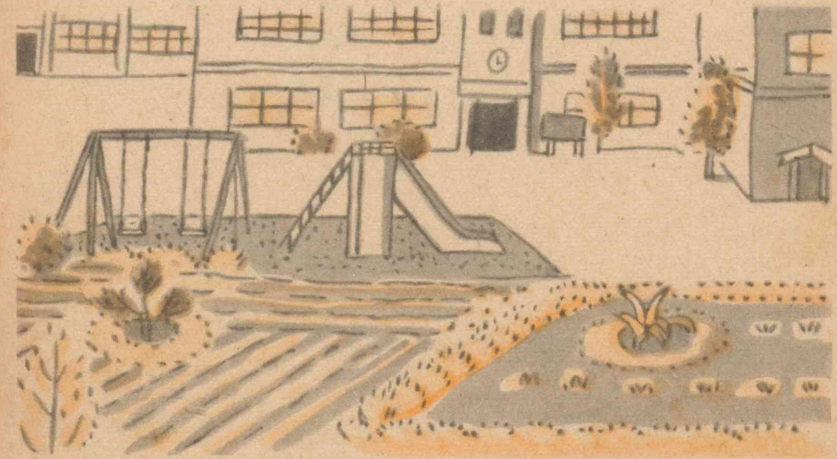
女 二 諸先生のご健康をいのります。
男 全 員 希望に満ちた学校。
男 三 在校生の諸君、元気でいてください。
女 全 員 なごりつきない学校。
女 三 私たちはいつまでも学校をわすれません。

男 一 さようなら。
女 一 さようなら。
男 二 黒板、つくえ、こしかけ。
女 二 教室、ろうか。
全 員 さようなら。
男 二 遊動円木、すべり台。

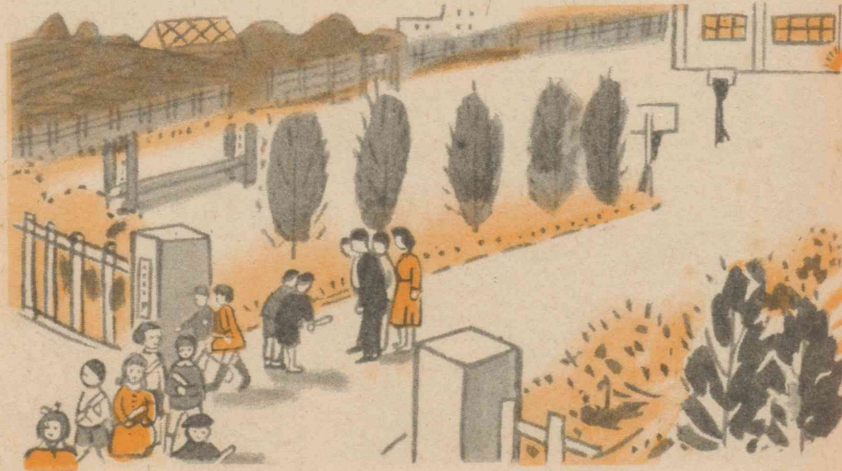
女 三 運動場、学校園。
 全 員 さようなら。
 男 一 ピアノ、オルガン。
 女 一 始業、終業のかね。
 全 員 さようなら。

「あおげば尊し」の音楽

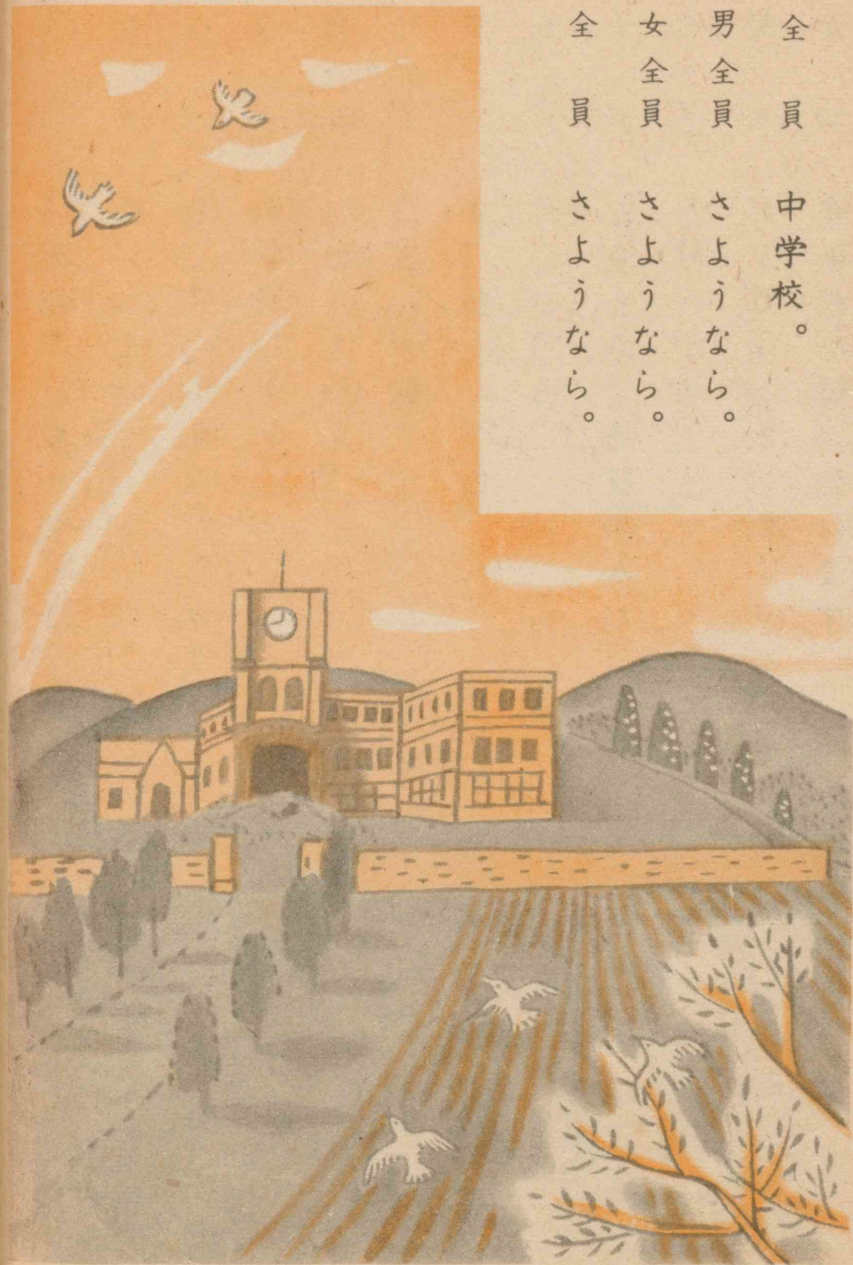
男 二 なつかしい先生。
 全 員 なつかしい先生。
 男 三 ぼくらはす立つわか鳥。
 女 三 す立つわか鳥。



男 一 卒業証書は白いつばさ。
 全 員 白いつばさ。
 女 一 日ごろの教訓身にしまて。
 全 員 教訓身にしまて。
 男 二 はばたき強く。
 全 員 はばたき強く。
 男 三 今、新しい門出。
 全 員 新しい門出。
 女 三 なりわたる希望のかね。
 全 員 希望のかね。
 男 一 にじ立つおかの新しい校舎に。
 女 一 中学校が待っています。



全 員 中 学 校。
 男 全 員 さ よ う な ら。
 女 全 員 さ よ う な ら。
 全 員 さ よ う な ら。



学習の手引

一 文学の味わい方

(一) タヤけ

- (1) 文学は、その人によってどんなにも深く味わうことができます。この文を読んで、一つ一つのはい句をよく味わいましょう。
 - (2) それぞれのはい句について、あなたの感じたことをノートに書いてもらいなさい。
 - (3) 文を読んで、次ぎの問題に答えなさい。
 ○ 季題というのはどんなことですか。
 ○ この文に出てくるはい句の季題を書き出してもらいなさい。
- 「下雲」「上雲」とはどんなものですか。

(二) ひどふさのぶどう

- (1) 「ひどふさのぶどう」とはどういうことですか。
 ○ 「朝ぐもり」とはどういうことですか。
 ○ 次のことばを漢字で書きましょう。
 ○ ちへいせん ○ まひる ○ きかい
 ○ ぶんしょう ○ せけん ○ いみ
 ○ ちやいろ ○ りょうがわ ○ はんたい
- (2) 「ひどふさのぶどう」は、大体どんなことを書いてある作品ですが、みじかくまとめてお話ししましょう。
- (3) 「ひどふさのぶどう」という題をつけたのか、考えてみましょう。
- (4) この作品の主題はなんてしょう。題目の「ひどふさのぶどう」とくらべて研究しましょう。

(5) ぬすみをした少年に対して、先生はどんなたいどで接しましたか。先生のことばをよく味わいましょう。

(6) 同級生の前では、反こうしたりごまかそうとしていた少年が、先生の前では、どうしてすなおで正直な心になったのでしょうか。

(7) ぬすみをした少年は、次ぎの日、どんな気持ちで学校へ出かけましたか。また、どうして学校へ出かけることになったのでしょうか。

(8) この文を読んで、ほんとうの愛とはどんなものか、よく考えましょう。

(9) 文学を正しく深く味わうためには、どんなことが大切か、整理してノートに書きとっておきましょう。

(10) 次ぎの語を使って短文を作りましょう。
か。 機械工場では、どんな仕事をしてい

か。 焼き曲げ工場では、おもにどんな仕事をしてい

(7) 第一船台では、どんな仕事をしてい

(8) お話を聞いたり、参考書を調べたりして、進水式の様子を研究してみよう。

(9) みなさんも、見学したことを文に作ってみましょう。
みましよう。
(10) 次ぎの漢字に読みがなをつけなさい。
○工員 ○正門 ○事務所 ○設備
○設計 ○展開図 ○起重機 ○運ぶ
○移動 ○加熱 ○貨物船 ○述べる
(二) 南水洋の捕けい

○念をおす ○関係 ○主題
○感化力 ○愛情 ○立場
○いかにも ○意外 ○理解

(11) 次ぎの○の中に漢字を入れましょう。
○ 学校の○き○りに見るけしき。

○ 同○○たちが少年の○口をいった。
○ 真の○は相○を○敬する心の上に立つ。
ニ 生産の喜び

(一) 造船所
(1) 「造船所」の文をよく読んで、船がどんな順序でつくられるかを、調べましょう。

(2) 設計課では、どんな仕事をしてい

(3) 原図場というのはどんな仕事をするところですか。ここでは、船のどんなことが、きまりますか。

(4) け書き場では、どんな仕事をしてい

(1) 文を読んで、次ぎのことに答えましょう。
○ 内地を出て何日めに、南半球にはいつ

か。 南半球のある地点の朝と夜のけしき。
○ くじらを見つけてからとらえるまでのじゅんじょ。

○ 極光のもよう。
(2) □の所に、てきとうなことばを入れま

しょう。
○ 太陽は□□□□とかがやいて、すばらしい□□である。
○ 船橋にはきん張の色が□□□□。
○ 南水洋の神びに、身も□□ひきこまれていった。
(3) 次ぎの人は、どんなやくめをしますか。
○ ほう手 ○マストの見張り ○当直の人

○作業員

(4) 次のことばを説明しましょう。

○赤道無風帯 ○気温 ○天然色映画

○南水洋 ○群水 ○伝声管 ○送気管

○水平線 ○横付け ○オーロラ ○神び

(5) 漢字に書きあらためましょう。

○わた ○ごうれい ○のびる

○きしょう ○きょくこう

三 日本のおもかげ

(1) 「日本のおもかげ」の文を、よく読めるように練習しましょう。

(2) 「日本のおもかげ」にとりあげられている十六の材料について、図書館や、めいめいの家にある参考材料を集めましょう。

(3) 文をよく読んで、次ぎの問題に答えなさい。

しょう。

○「まき絵書だな」「うきよ絵」「解体図」を読んで感じたことを発表しましょう。

○「汽車第一号」を読んで、今の鉄道とくらべて、みなさんはどんなことを感じますか。

○文化国家を築くために、「議事堂」は、どんなやくめをもっているでしょう。

(4) 「日本のおもかげ」の全体を読んで、感想をまとめて発表しましょう。

四 ことばと生活

(一) 妹のことば

(1) この文を読んで、どんなことに気がつきましたが。

(2) 妹は、いつごろからことばを話しはじめましたか。

○「貝づか」と「石器・土器」と「はにわ」を読んで、大むかしの入々の生活の様子をしらべましょう。

○「ゆめどのかんのん」と「はじめての銭」と「びょうどういん」とを読んで、どんなことを感じますか。それを発表してみましょう。

○「やまと絵」と「絵物語」を読んで、そのころの入々が、どのようなことにすぐれていたかを研究してみましょう。

○「におう様」と「能面」をよんで、むかしの人が、どのようににすぐれたちょうこくをしたかをしらべましょう。

○「イソップ物語」を読んで、むかし外国からいろいろのものが伝わってきて、日本にどんなことがあったかをしらべま

(3) 妹のことばの中で、みなさんのおもしろいと思ったのはどれですか。ノートに書きだしてください。

(4) このように、ことばを話しはじめたころの弟や妹のことばを集めてみましょう。

(二) いなかのことば

(1) この文を読んで、自分の考えたことを発表してください。

(2) 方言と標準語は、どんなところがちがいますか。

(3) みなさんも、このように方言をたくさん集めてもらなさい。

(三) むかしのことば

(1) むかしのことばを、なぜ書きことばというのでしょうか。

(2) 今のことばは、むかしのことばが、どん

なじゅんにかわつてきたものですか。

(3) 山田美妙ひみょうについて、もつとくわしく調べ
てごらん下さい。みなさんはこの入のやつ
たことをどう思いますか。

(4) 話しことばとその記録を、これからさき
どのようにしていくのがいちばんいいと考
えますか。自分の考えを発表してください。

(四) 外国のことば

(1) 自分の知っている外国からきたことばに
ついて、できるだけたくさんノートに書き
だしてください。

(2) みなさんも共同して、このような外国か
らきたことば集を作ってください。

五 ひとすじの道

(一) ベートーベン

(1) くりかえし読んでみて、まず、次ぎのよ

(3) すぐれた音楽家の伝記をたくさん読みま
しょう。深く感動したことを感想文に書い
て発表しましょう。

(二) ミレー

(1) よく読みかえして次ぎのようなことを調
べましょう。

○ ミレーは、少年時代をどんなふうに通
ごしたか。

○ パリの画じゆくを去つたのはなぜか。

○ それからのミレーは、どんなに苦しい
修行をしたか。

○ 「みをふる人」が入選したころは、どん
な生活であつたか。

○ ミレーがほんとうの農民画家になつた
のは、どんなきつかけからか。

○ ミレーには、どんな名作があるか。そ

うなことから調べていきましょう。

○ ベートーベンは、いつ、どこで生まれ
たか。

○ 少年時代のベートーベンは、どのよう
な苦しい修行を重ねたか。

○ 三十一才のころのベートーベンは、ど
のような逆境とたたかつたか。

○ 第三の逆境がおそいかつたのは何才
のころか。それは何であつたか。

○ 「第九シンフォニー」の第一回公演の時
のことを、あなたはどう思ったか。

○ ベートーベンにはどんな名曲があるか。
そして、それは、どんな時に作られたか。

(2) 次ぎ次ぎとおそいかかる逆境を、りっぱ
に戦いぬいたベートーベンの生がいについ
て、あなたはどんな感想を持ちましたか。

れには、どんな人々がえがかれてゐるか。

(2) ミレーの苦しい修行と、絵に対する考え
かたについて、あなたはどう思いますか。

(3) すぐれた画家の伝記を読みましょう。そ
してその感想をみんなて話しあいましょう

六 人類のゆめ

(1) エネスコは何のために生まれましたか。

(2) 「世界から『無ち』をなくす」ということ
についてよく調べ、要点をノートにまとめ
ましょう。

(3) エネスコ運動で、「情報」が大切であると
いう意味をよく考えてみましょう。

(4) 次ぎの漢字に読みがなをつけなさい。

○ 教育団 ○ 世話役 ○ 逆 ○ 絶対

○ 決議 ○ 賛成 ○ 情報 ○ 解放

○ 宣伝 ○ 勤員 ○ 全面 ○ 楽園

相みたがい	177	いい方	23	うざくまつ(て)	109	え物	47
青写真	33	以外	9	うつりさる	4	絵物語	65
あかね色	44	遺書	96	うらがれ	5	演そう旅行	95
朝ぐもり	9	いそいそと	22	上雲	4	追いうちがまえ	47
足場	41	いじけた	27	運が	31	応接用	33
味わい方	4	イソップ物語	68	運ばん	37	オーケストラ	93
あつかい方	29	一流の	105	運命	34	オーロラ	53
あとかた	5	移動起重機	37	永遠	22	犯し(て)	28
雨どい	10	冒ぶくろ	110	映画会	44	お国なまり集	80
歩みくる	11	いもの	35	栄よ	124	おくゆき	38
ありとあらゆる	120	ウイーン	94	えどっ子べん	82	落ぼ拾い	113
アルミニウム	89	うきよ絵	70	絵友たち	105	おびれ	50



新しく出たおもなことば

七 卒業の日

- (5) 次のことばを使って、短文を作りなさい。
- 大歓げい
 - 一つももらさず
 - 完全
 - 分秒をあらそって
 - 昼も夜も
- (1) このよびかけは、いくつの場面からできていますか。一つ一つの場面について、話し合いをしてください。
- (2) 卒業の日をむかえての喜びやほこりは、どこに表わされていますか。最も強く表われているところを、ノートに書きぬいてごらんください。
- (3) 卒業にあたって、六か年間の思い出が、

- みなさんにもいろいろあるでしょう。それを、みんなて話し合ってください。
- (4) やくわりをきめて、このよびかけをやってみましょう。
- どのような順序で、けいこしていったらいいか、初めによく相談してください。
 - ぶたいの作り方を工夫してみてください。
 - 心持がよく現われるように、動作や、発声法や、語調などについてよく研究しましょう。
 - 音楽やその他の音きょうについても、効果のよく現われるように考えましょう。
 - 先生や家の人たちをお招きして、みていただきましょう。
- (5) 卒業の日のよびかけや、詩や、作文を書きましよう。

原図場	35	ごわす	85	下雲	4	情報	118
建造中	41	ごんす	85	したため	96	じょうもん式土器	59
言文いっち	86	在校	123	自治	134	しょ名	118
光栄	97	さぞ	112	始末	98	シルレル	99
公演	99	作曲	93	習慣	101	神経質	26
こうかい	24	察し	27	重要	36	新語	91
校旗	133	さるすべり	7	修業	103	進水式	42
工芸品	69	サロン	107	じゆく話	90	人生	25
興奮	99	さんさんと	45	じゆく生	106	神び	55
氷柱	46	さん橋	53	主人公	23	シンフォニー	96
コークス	89	しおふき	46	主題	23	人類	115
心づかい	27	指き	97	出品	113	すずめ色	11
ござる	85	しき地	36	純白の	44	勧め(ながら)	33
語数	90	しけ	52	しょうかい	32	す立つ	136
(子ども)かな	5	自主	134	上下両院	118	ズック	6

おもかけ	56	かたこと	77	木ぐつ	105	極点	98
女文部大臣	116	かたすみ	109	気位	105	巨船	53
がい歌	50	かちどき	131	技師	32	巨体	49
解体図	70	かつて(すぎる)	21	議事堂	73	きん張	47
貝づか	57	かつば	89	起重機	37	句	6
解放	119	かつぱつに	10	基そ	36	クロイツェルソナタ	96
画家	103	活やく	42	季題	5	クロスワード・パズル	62
書きことば	83	活カ	102	きたえあげる	26	群水	46
学費	106	門出	137	きつぱりと	112	経験	25
革命	108	加熱する	40	きびしさ	24	芸術品	67
歌げき	97	画布	107	気味	21	芸能会	132
加工	37	貨物船	41	逆境	95	け書き場	38
画才	103	感化力	24	キヤッチャーボート	50	決議	118
画じゆく	105	関東方言	84	教訓	137	厳格	93
型板	35	木型	35	極光	55	げん楽四重奏曲	98

天分	93	似顔絵	107	はにかみや	22	びろうど	89
天然色映画	44	ニッケル	89	はにわ	60	フィート	52
トーカー	88	入選	107	はばん(て)	121	富貴	97
動員	120	のうまくえん	104	はべる	85	フォーク	88
東京方言	83	農民画家	104	版画	70	ブック	87
当直	53	能面	67	はんこう	23	仏像	61
とかく	25	のたうち	50	ピアノスト	95	船主	33
時おり	54	はい句	9	ピアノソナタ	98	ふか	50
とだえ(て)	106	ハイドン	95	ひいおじいさん	56	奮い起こす	102
内心	25	はけ目	60	PTA	80	文相会議	116
なきじゃくり	16	果して	25	美術館	106	平安時代	65
なぞ	55	はっしど	50	ひみつ	120	平和運動	116
なみなみの	71	八方	95	表現	5	ベートーベン	92
南氷洋	42	話ことば	83	標準語	83	へつらわ(ず)	101
におう様	66	話せない	105	表情	67	へ(に)	11

素焼き	60	船台	37	第四章	99	血しお	50
寸法書	60	船体	33	第九シンフォニー	99	チョコレート	35
正義	119	船体線図	33	態度	101	通過	43
生産	31	全人類	119	ダイナマイト	89	妻	107
誠実	115	先祖代々	103	代表作	13	罪	28
西洋ふどう	17	壯観	53	たえたえに	50	積荷	33
赤道無風帯	43	送気管	50	たくらみ	120	つんざく	49
石器	58	造船工事	36	だ手	48	ていこう	14
設計課	33	造船所	31	断ち切る	39	テープ	131
絶望	96	そうらう	84	立ちなおらせ(た)	29	適当な	27
セルロイド	89	そうらえ	85	立場	27	鉄板	36
世話役	116	卒業証書	124	立ち	6	テレビジョン	88
船橋	44	祖母	104	たんじょう	73	田園	96
船室	46	ぞんがい	25	だんな	89	展開図	35
船首	48	題材	106	談話	53	伝声管	47

兄 <small>あに</small>	錢 <small>ぜに</small>	延 <small>のびる</small>	句 <small>く</small>
(98)	(62)	(49)	(6)
我 <small>われ</small>	富 <small>ふ</small>	象 <small>しょう</small>	罪 <small>つみ</small>
(99)	(70)	(51)	(28)
己 <small>こ</small>	嚴 <small>げん</small>	純 <small>じゆん</small>	犯 <small>おか</small> して
(101)	(93)	(52)	(28)
慣 <small>かん</small>	再 <small>また</small> び	天皇 <small>てんおう</small>	構 <small>かま</small> えて
(101)	(95)	(60)	(31)
態 <small>たい</small>	策 <small>さく</small>	皇后 <small>こうごう</small>	勸 <small>すす</small> め
(101)	(96)	(60)	(33)
補 <small>ほ</small>	招 <small>まね</small> かれ	仏 <small>ぶつ</small>	綿 <small>わた</small>
(105)	(97)	(61)	(44)

新しく出た漢字

マテガイ	まき 絵書 だな	ポルトガル	歩調	母船	ほこる	捕 <small>と</small> げい船団	補給金	訪問	法則	ほう声	ほう手	ほうおう	望遠写真	へん見
58	69	90	74	50	130	43	105	53	79	49	45	64	120	119
もすりん	木炭画	モーツァルト	めりんす	命中	名句	名曲	無ち	むどうさに	耳鳴り	見守られ(て)	道連れ	水ぎわ	万策	まわりどろろ
89	103	92	89	49	117	102	117	46	95	115	115	13	96	127
ようこう色	ゆめどの	エネスコ	ゆか張り	遊動円木	やよい式土器	やまと絵	山手	やばん入	やの根	やぐら型	焼き曲げ工場	もり綱	もりたて(て)	もつれあつ(て)
13	61	116	34	135	59	64	13	105	59	31	40	49	74	12
				わびしく	わどうかいほう	ろっこつ	ろくろ	連合国	ループル	臨海学校	ラケット	楽園	来ひん	横付け
				54	62	40	49	116	106	129	88	121	123	53

訓 <small>くん</small>	誠 <small>せい</small>	革 <small>かく</small>
(137)	(115)	(108)
	大臣 <small>だいじん</small>	穀 <small>こく</small>
	(116)	(108)
	領 <small>りやう</small>	胃 <small>い</small>
	(118)	(110)
	宣 <small>せん</small>	承 <small>しょう</small>
	(119)	(112)
	恩 <small>おん</small>	認 <small>みと</small> め
	(125)	(113)
	登 <small>のぼ</small> り	耕 <small>かむ</small> して
	(127)	(114)

編 修 委 員

日本女子大学付属 豊明小学校 教諭	成蹊中学校教諭	同	東京学芸大学竹早 付属小学校教諭	日本女子大学付属 豊明小学校主事	西原慶一
齋田喬	飛田多喜雄	山下正雄	泉節二	山原慶一	

小谷野半二 高橋庸男

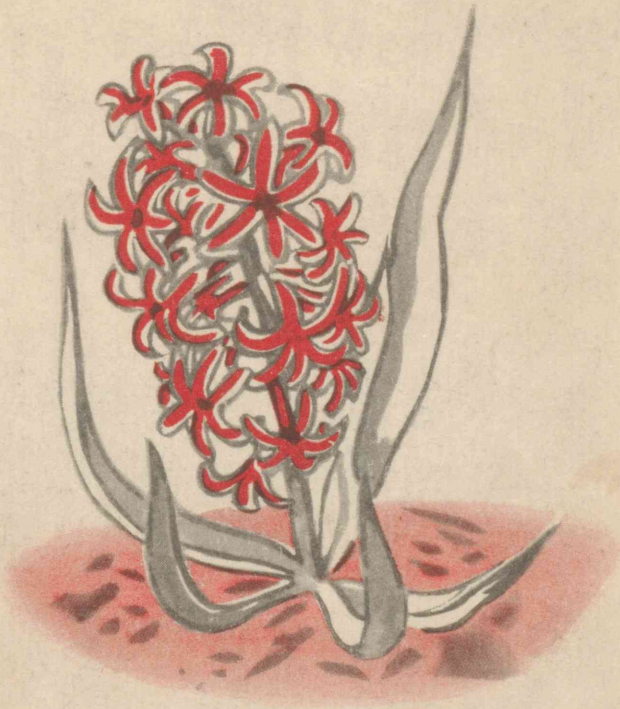
さし絵・表紙

Approved by Ministry of Education (Date Oct. 26, 1950)

発行所	12 二葉	小国628
東京都北区稲付町二丁目二〇八番地 二葉株式会社	印刷者	東京都北区稲付町二丁目二〇八番地 二葉株式会社
代表者 大野治輔	代表者	大野治輔
著作者	代表者	西原慶一
定価	円	銭

昭和二十六年五月十日印刷
昭和二十六年五月十五日発行
(昭和二十五年八月十二日文部省検定済)

国語の本十二(小学校第六学年後期用)



なまえ

広島大学図書

0130449913



二葉株式会社

庫
50
13